

金沢城の地割図と二の丸御殿絵図

—金沢城絵図調査報告Ⅱ—

木越 隆三

はじめに

平成16年度の金沢城絵図調査は、15年度に続き二の丸関係絵図の調査を行ったほか、金谷御殿図・竹沢御殿図についても調査し、全域絵図でも一、二追加資料を得た。本報告では前号「金沢城絵図調査報告Ⅰ」で十分ふれられなかった「金沢城中 地割絵図」10枚1組（加越能文庫）および「金沢城絵図」（石川県立歴史博物館蔵）・「金沢城内絵図」（滋賀県立安土城考古博物館蔵）が、江戸前期（時期区分は前号による）の全域図として精細であり、かつ共通点もあるので相互関係を検討したい。また、前号「金沢城絵図調査報告Ⅰ」で簡単に紹介し、詳細な検討を先に延ばした延宝年間作成の「金沢御城絵図」（前田育徳会蔵）について、寛文8年「加賀国金沢之絵図」と比較し正保城絵図の図柄推定を試み所見を示したい。

このほか15・16年度調査した二の丸関係絵図について概要を分類・紹介し、二の丸御殿図約40点の編年の整理も試みたい。しかし、文化5年火災以後の江戸後期の二の丸御殿図については、より詳細な関連古文書・文献等の検討が必要なので、今回は文化以前が主となることをお断りしておきたい。

1章 江戸前期の地割図について

金沢城全域図を作成目的により、（1）幕用図、（2）藩用図、（3）軍学関係図（縄張図）（4）景観案内図（鳥瞰図、細見図）の4つに区分し、それぞれの目的に応じ図柄・図様に一定の相違があるとの仮説に基づき、分類・編年の作業をすすめたが、予想以上に密接な関連を認めることができた（前号「金沢城絵図調査報告Ⅰ」）。本報告でも、絵図作成目的と図柄・図様の間には一定の相関関係があることを指針とし考察をすすめてゆくが、本報告で使用する「図柄」「図様」の用語については、以下のよう

図様・・・ 絵図形態（一鋪か数鋪で1セットか、卷子か冊子かなどの形状）、絵図サイズ、縮尺、彩色や彩色凡例、標題や方角などの文字位置、など絵図作成上の基本仕様

図柄・・・ 対象をどのような精度、デザインで描いたのか。地図としての巧拙および表現技法や絵画的な特徴

さて前号では、幕用図のうち城郭修補願図と藩用図のうち建物等色分図について編年案を示したほか、普請会所系と作事所系という2系統の絵図作成者集団を析出し、幕用図と藩用図がどのように関連するか検討したが、本章で検討するのは、

- 1 「金沢城絵図」（石川県立歴史博物館蔵、以下では「歴博図」と略称する）
（平成3年報告書未掲載、『金沢城研究』創刊号所収「金沢城全域絵図目録」のⅡ29）
- 2 「金沢城内絵図」（滋賀県立安土城考古博物館蔵）
（平成3年報告書未掲載、『金沢城研究』創刊号所収「金沢城全域絵図目録」未掲載）
- 3 「金沢城中地割絵図」10枚1組（加越能文庫、金沢市立玉川図書館蔵）
（平成3年報告書絵図目録6・7・8号、『金沢城研究』創刊号所収「金沢城全域絵図目録」の ）

の3つの全域図である。3点とも曲輪内部の建物を略した平面図であり、江戸前期（寛永8年～宝暦9年）の景観を詳細な寸法記載によって示す点が共通する。とくに、1・2は、ほぼ600分1の「分間図」の1枚図で、櫓・土居・堀・門などの寸法記載はほとんど同じであった（表1）。また図柄・図様もほぼ同じなので、作成者は同一集団とみてよい。3については、江戸後期の建物等色分絵図（前

号「金沢城絵図調査報告Ⅰ」)と図様は異なるものの、櫓台や堀・長屋などの寸法記載や図柄が似ているので、江戸後期の類似の絵図との比較によって特徴を考察できる。これらは図柄・図様・文字記載などからみて藩の作事所もしくは普請会所で作成された藩用図に分類できる。以下、順に所見を述べる。

(1)「金沢城絵図」(石川県立歴史博物館蔵)128×119cm 彩色

本図は展示中であるが、もと金沢市内の商家旧蔵の全域図である。本図の景観年代は、細工所が新丸にある、三の丸九十間長屋の規模、御花畑にある4棟の武具土蔵、などから宝暦大火以前、寛永8年以後の景観を描くことは動かないが、新丸に描かれた作事所の中に「津田故玄蕃上ヶ屋敷」という注記があるので、新丸の津田玄蕃正忠(万治3年没)の屋敷地が作事所に転用された後の景観である。

作事所の位置について『越登賀三州志』『金沢古蹟志』は、万治2年(1659)に新丸から、のちの蓮池庭(百間堀対岸)に移転したのち、延宝4年(1676)に再度蓮池から新丸に戻り、かつての津田玄蕃邸地も合わせて敷地が大きくなったとする。ゆえに本図の新丸作事所は、再移転後の作事所であることは確実であり、本図の景観年代は延宝4年以後、宝暦9年以前と限定できる。津田玄蕃(正忠)邸が、新丸から尾坂下へ移動した時期は、万治2年の新丸作事所移転の時期が最も可能性がたかい。同年、幕府目付兩名(石川弥左衛門實成・内藤新五郎正俊)が、津田家屋敷に半年間滞在した時、屋敷を早々に明け渡している⁽¹⁾、万治元年末に移転していたとみるべきであろう。その翌々年、玄蕃正忠が亡くなり、内蔵助正真が家督を継ぐが、のち玄蕃正真となるので、正忠時代の新丸屋敷は「故玄蕃上ヶ屋敷」と表現されたのである⁽²⁾。蛇足になるが、寛文7年「金沢図」⁽³⁾では尾坂下津田邸(現在の大手町医師会館付近)に「津田内蔵助」と記すが、「寛文11年侍帳」⁽⁴⁾や「延宝金沢図」⁽⁵⁾では「津田玄蕃」と変わっているので、寛文7～11年の間に津田正真の通称が内蔵助から玄蕃に変更されたことがわかり、延宝4年以後とした本図の所見と矛盾しない。

本図の金谷出丸に「金谷」と記すので、御殿が造営されていない時期とみられる。また、元禄7～9年に二の丸御殿の部屋方が増新築された曲輪には「御数寄屋敷」とのみ記載し、部屋方があるようにみえない。また二の丸裏口門を「切手御門」と称す。安土の「金沢城内絵図」では、たんに「御門」とするが、前号絵図調査報告Ⅰ(および本報告3章)で、元禄の部屋方等増築以前の二の丸御殿図とした「金沢城二之丸座舗之図」も裏口門を「切手御門」と記すので、本図の記載は誤記ではなく、この時期、裏口門は切手門と呼ばれていたのである。数寄屋敷に部屋方が増築された元禄10年以後の、建物等色分図はすべて「裏口門」とするので、元禄の部屋方増築を契機に、切手門は裏口門もしくは裏御門と改称され、数寄屋敷の北入口のことを新たに切手門と呼ぶようになったとみられる⁽⁶⁾。したがって、本図の景観年代の下限は元禄7年頃となり、本図は延宝4年以後元禄初期までの景観を描く17世紀後半の絵図と特定できる。つまり、前号で考察した建物等色分図のなかで最も古いとされた前期A類(元禄10年以後、享保～延享期)より古い前期金沢城図で、17世紀後半の代表的金沢城全域図と評価できるのである。

本図の図柄は建物等色分図と異なり、曲輪内部にある御殿や土蔵などの建物を描かず、石垣・土居・門廻りの櫓・堀・長屋等を詳細に描くので一見して、国絵図系の図柄に似ている。しかし、書かれた建物は建物等色分図と同様の平面図で黄色の彩色があり、国絵図の鳥瞰図風の図柄とは明らかに異なる。また、堀の種類を色などで書き分けている点は後期の建物等色分図と近似する。文字記載をみると、櫓の立体的な規模を表1のごとく簡潔に表記し、長屋など建物の縦・横の長さ、御門下の建物幅などを記載するが、石垣・堀付近は、石垣・堀・土居を測ったというより、そこに設置された堀・長屋など建物の長さを測ったものと観察された。したがって、本図の図柄は、普請会所系絵図と懸隔があり建物等色分図により近い。前期の建物等色分図の先駆とみられる図柄であり、本図の作成者は作

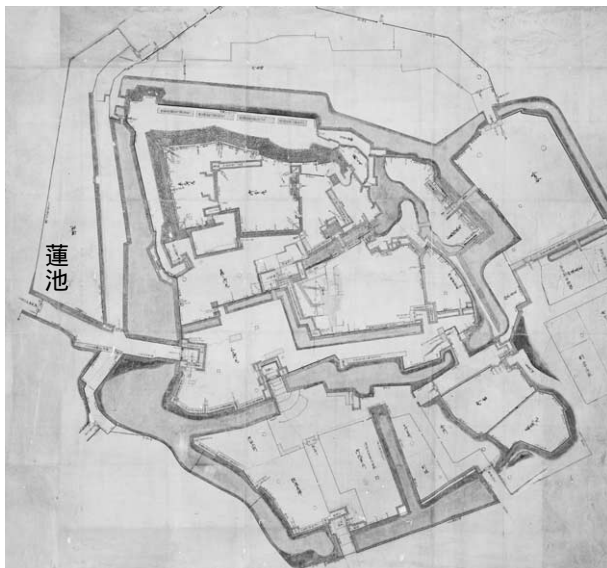
事所とみるのが妥当で、藩所屬の御大工による作成とみてよからう。

なお、本図に○印と井印で井戸の位置を示すが、合わせて31箇所（○印23箇所、井印8箇所）もある。マークを違わせた理由は不明であるが、普請会所系絵図、作事所系の建物等色分図でも井戸の表記があるので、その比較検討と発掘結果の突き合せによって、表記の差異の意味、たとえば古井戸か現役井戸か、井戸構造・規模の相違によるものか、などが解明されるであろう。今後の課題としたい。

表1 歴博「金沢城絵図」と安土考古博「金沢城内絵図」の文字記載比較

区 分	金沢城絵図（石川県立歴史博物館）	金沢城内絵図（安土城考古博物館）	
本 丸	三階御櫓 5 間四方、上重 2 間半四方	三階櫓 5 間四方、上重 2 間半四方	○
	（三階櫓続三十間）御長屋 2 間半に30間	御長屋 2 間半に30間	○
	辰巳御櫓 3 間半 4 間半 御長屋 2 間 4 間	辰巳御櫓 3 間半 4 間半、上重 3 間四方 御長屋 2 間 4 間	
	（中）御櫓 3 間に 5 間二階	御櫓 3 間 5 間 二階	○
	丑寅御櫓 4 間半に 5 間、上重 3 間半四方	丑寅御櫓 4 間半 5 間上重 3 間半四方	○
	戌亥御櫓 5 間四方上重 3 間四方	戌亥御櫓 5 間四方上重 3 間四方	○
	申酉御櫓 5 間四方上重 3 間四方	申酉御櫓 5 間四方上重 3 間四方	○
鶴の丸	鉄御門 御門下 4 間 2 尺 上二階、御長屋 3 間 1 尺に 17 間	御門下 4 間 2 尺 上二階、御長屋 3 間 1 尺に 17 間	○
	（南門）御門二階 御門下 2 間 2 尺、御長屋 2 間 1 尺に 6 間	御門 2 間 2 尺上二階、御長屋 2 間 1 尺に 6 間	○
二の丸	水之手御門下 3 間半、御長屋二階 3 間に 9 間	御門下 3 間半、御長屋 3 間 9 間二階	○
	橋爪御門（二の門）御門 3 間半に 9 間 上二階	橋爪御門（二の門）御門 3 間半に 9 間 上二階	○
	（橋爪一の門）御門 2 間半	（橋爪一の門）御門 2 間半	○
	（橋爪続櫓）御櫓 5 間半に 5 間、上重 3 間半に 3 間	（橋爪続櫓）御櫓 5 間半に 5 間、上重 3 間に 3 間半	○
	（五十間長屋）御長屋御門より御櫓迄 3 間半に 50 間二階	（五十間長屋）御長屋御門より御櫓迄 3 間半に 50 間二階	○
	（菱櫓）御櫓二階 5 間に 5 間半、上重 3 間四方	（菱櫓）御櫓二階 5 間に 5 間半、上重 3 間四方	○
	御楽屋長屋 3 間に 28 間半	御楽屋長屋 3 間に 28 間 3 尺	○
	切手御門 御門下 4 間半、上 2 階 3 間に 7 間	御門 4 間半 上二階 3 間に 7 間	○
	（裏口門長屋）御長屋 2 間半に 10 間	御長屋 2 間半に 10 間	○
	（難土蔵）御長屋二階 3 間半に 9 間半	（難土蔵）御長屋二階 3 間半に 9 間半	○
三の丸	石川御門御櫓 4 間 3 尺 5 寸に 5 間 上重 2 間 4 尺 5 寸四方	石川御門御櫓 4 間 3 尺 5 寸に 5 間 上重 2 間 4 尺 5 寸四方	○
	（石川門）御長屋 2 間半に 16 間半 2 階	御長屋 2 間半に 16 間半 2 階	○
	（石川二の門渡櫓）御長屋 4 間に 12 間 5 尺、御門下 5 間 2 尺 上二階	御長屋、御門 5 間 2 尺 上二階	
	（石川一の門）御門 2 間 2 尺 5 寸、二重塀 2 間 3 尺	（石川一の門）御門 2 間 2 尺 5 寸、二重塀 2 間半	○
	（90間長屋）御長屋二階 3 間に 13 間	御長屋二階 3 間に 13 間	○
	（90間長屋隅櫓）御櫓二階	御櫓二階 5 間に 5 間 2 尺	
	（90間長屋）御長屋二階 3 間に 19 間 1 尺	御長屋二階 3 間に 19 間 1 尺	○
	（90間長屋）御長屋二階 3 間 5 尺に 7 間	御長屋二階 3 間 5 尺に 7 間	○
	（90間長屋）御長屋二階 3 間に 10 間 4 尺 5 寸	御長屋二階 3 間に 10 間 4 尺 5 寸	○
	（90間長屋）御長屋二階 3 間 5 尺に 7 間	御長屋二階 3 間 5 尺に 7 間	○
	（90間長屋）御長屋二階 3 間に 22 間 5 尺	御長屋二階 3 間に 22 間 5 尺	○
	河北門御門（二の門渡櫓）御長屋 4 間 2 尺に 13 間 5 尺	河北御（二の門渡櫓）御長屋 4 間 2 尺に 13 間 5 尺	○
	（河北門枅形）御長屋 2 間に 8 間 4 尺	（河北門枅形）御長屋 2 間に 8 間 4 尺、土塀 6 間 2 尺 3 寸	
新 丸	（ニラミ櫓）御櫓	（ニラミ櫓）御櫓 4 間に 6 間、上重 2 間半に 3 間半	
	尾坂御門 御門 6 間 （石垣台）4 間に 14 間 2 尺、14 間に 3 間・5 間	御門 6 間 （石垣台）4 間に 14 間 2 尺、14 間に 3 間・5 間	○
堂 形・ 金 谷 付 近	越後屋鋪	寄合所	×
	御作事所 津田故玄蕃上ヶ屋敷 塀67間 4 尺 5 寸	津田玄蕃上ヶ屋敷	×
	車橋 2 間 1 尺	御門 2 間 1 尺	○
	坂下御門 3 間 2 尺	御門 3 間 2 尺	○
	御馬場	堂形御米蔵屋敷	×
	御厩御門	略す	
	金谷	金谷屋敷	
	金谷御門 御門下 4 間 御長屋 4 間に 13 間 上二階	金谷御門 御門下 4 間 御長屋 4 間に 13 間 上二階	○

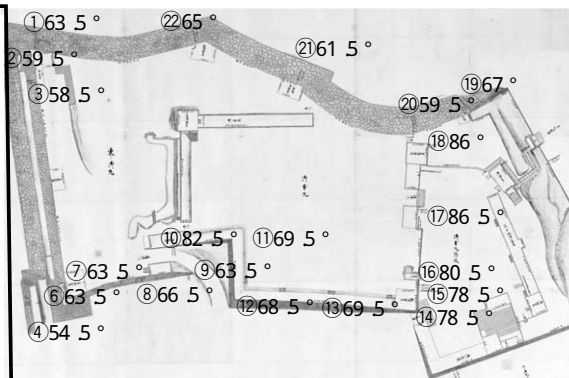
・（ ）内は筆者が説明のため補った名称。○印は一致、印は一部相異あり、×印は大きく相違することを示す。原漢文を読み下し表記した。



(1)「金沢城絵図」(石川県立歴史博物館蔵)



(2)「金沢城内絵図」(安土城考古博物館蔵)



(3)「金沢城中地割絵図・東丸本丸」(金沢市立玉川図書館蔵)

延宝城小絵図「金沢御城絵図」(尊経閣文庫・前田育徳会蔵)

(2) 「金沢城内絵図」(安土城考古博物館蔵) 122×138cm 彩色

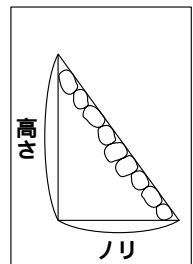
平成16年10月22日、安土城考古博物館にて「金沢城内絵図」の閲覧を許され調査を行った。本図が上記の歴博図と非常に近似したものであることは、現所蔵機関からの照会により石川県立歴史博物館で確認しており、『金沢市史』資料18(絵図・地図)でもそのように指摘している。しかし、本図では蓮池庭のあった場所に「御作事所」と記し、新丸作事所付近は「津田玄蕃上ヶ屋敷」と記すことから、作事所が最初に蓮池へ移転した時期の景観であることは明かである。したがって、本図の景観年代は、万治2年(1659)～延宝4年(1676)の17年間に限定できる。全体の図柄・図様および建物規模等の文字記載は歴博図とほとんど同じで(表1)、本図と歴博図は密接な関係にあり、作成集団も同じとみられる。つまり本図が万治2年以後、延宝4年までに描かれたあと、本図を土台に作事所移転など延宝4年以後に生じた変化を明確に示した歴博図が描かれたのである。

以上により本図も作事所系絵図であり、かつ藩用図としては最古の遺品である可能性がたかい。幕用図として現存最古のものは寛文2年の城郭修補願図(尊経閣文庫蔵)であるが、絵図精度や情報量は本図のほうが上回っており、最古期(寛文期)の藩用図の作図技術の高さが注目される⁽⁷⁾。

(3) 「金沢城中地割絵図」10枚1組(加越能文庫、金沢市立玉川図書館蔵)

加越能文庫には、10枚組図の「金沢城中地割絵図」が甲乙丙3セット、合計30枚架蔵されている。10枚とも1間を4分(12ミリ)とする150分1の縮尺である。この縮尺では1枚にするのは無理があり10枚組図になったのであるが、100分1図を41枚に書き分けた江戸後期の建物等色分図⁽⁶⁾に対応し興味深い。しかし41枚組図は作事所作成の建物等色分絵図の1つとみられるのにたいし、本図は作事所系といえない面を多く持つ。

本図の景観年代は 新丸の細工所、九十間長屋の規模、御花畑の武具土蔵4棟、などから前期金沢城図(寛永8年～宝暦9年)であることは明らかなが、本丸の諸櫓については「三階櫓台」「巽櫓台」などと建物より櫓台石垣に関心を置いた書き方をする。また表2に示したように、本丸廻りの石垣の高さを22地点で測った結果を「高さ」「ノリ」の2種類の計測値で示す。この記載は本丸だけでなく二の丸・三の丸など10枚の絵図すべてに見られ、水堀廻りの石垣高さは「水底より」の高さを記す。石垣のノリ・高さとは、石垣現況の斜面長さでなく図示したように石垣斜面に対する底辺・高さに相当するもので、城石垣の専門職人である普請会所所属の穴生衆でなければ計測しえないデータと思われる。水底からの石垣高さの計測も同じである。図柄においても建物平面図がなく、石垣・堀・土居ばかりに特化して詳細に現況を描くので、本図に描かれた文字情報は普請会所が必要としたもので、普請会所が作成に関与したことは間違いない。しかし、絵図の仕上げ方がきわめて丁寧で江戸後期の作事所系絵図、たとえば天保期の42枚組図⁽⁸⁾や文化・文政期の「本丸・東丸図」⁽⁹⁾などと全体的に共通性が看取され、作事所での作成ということも考えられる。



ここで、後藤彦三郎が江戸前期の絵図作成について、次のようなことを記すので紹介しておこう。

【史料1】⁽¹⁰⁾

「松雲院公御代か、御城中御絵図間数付二而御上被成候由、御下絵図、天明年中、御城代より御渡、裏打はなれ候所々繕らせ指上候、誠二見事二相調候、絵図、御城ヲ中ニシテ土屋敷等調たるもの也、名前・町名八勿論無之候、都而御城絵図八御大工中山六兵衛与申者相調候、穴生二無之も口惜事候」

寛文2年の城郭修補願絵図が最初の御城図であることと、それが至って「廉図」であると指摘したあと上掲の記述がくるが、綱紀公の時代に間数付けのある「御城中御絵図」が提出され、その下絵図が

天明年間に金沢城代の命で補修されたという。修理された絵図は誠に見事な出来で、侍屋敷などが書き込まれているが侍名や町名はない。(その当時は)御城絵図はすべて御大工の中山六兵衛という者が作成しており、彼が穴生でないことが口惜しい、と彦三郎の感想が書かれる。

ここで「見事な絵図」とされた間数付けのある「御城中御絵図」に、城下町の侍屋敷は書かれるが侍名や町名はないというから、図柄からいうと現存の寛文8年「加賀国金沢之図」(加越能文庫、金沢市立玉川図書館蔵)と似ている。彦三郎は天明年間に補修された、現存の寛文8年「加賀国金沢之図」もしくはそれと類似の城下町図・城中絵図を閲覧し、それが御大工中山六兵衛の作であると聞いたのではないか。

ともあれ、この記述から綱紀時代(寛文～享保期)において、「御城絵図」や城下町図は主に作事所所屬の御大工が作成したと推察される。したがって、17世紀後半に作成された城絵図の多くは、作事所の御大工の作とみるべきで、寛文2・7・11年の城郭修補願図のような簡素な幕用図のみ穴生の作成とすべきなのであろう。

上記の間数付けのある「御城中御絵図」は、明らかに普請会所が作成を担当した絵図であり、作図依頼は普請奉行が行い、作成は御大工ということになる。よって本図も、普請会所が依頼し、御大工が作成した可能性がたかいと言わねばならない。この場合普請会所系か作事所系かの分類は困るが、作成目的からは普請会所系であり、作成者による分類では作事所系となる。

本章で検討した3つの絵図は、曲輪内の建物を描かず、城全体の区割を明確にし、ものによっては堀・石垣廻りの建物のみ平面図を描くので、城内の縄張りを明確にする絵図という意味でCの名称にならい「地割図」と総称したい。普請会所が必要とし所持した藩用図のなかで、地割図は幕用図系

の図柄のものと異り、精度にすぐれた詳細地図として独自の地位を占めていたといえよう。本章で考察した地割図は、3つとも作事所の御大工作成と推定できた。A・Bは作事所・普請会所いずれに架蔵されてもおかしくない精細図である。Cは普請会所の依頼で石垣に関する詳細データを記入した絵図とみられるので普請会所専用の絵図であろう。したがって、地割図は普請会所・作事所いずれも必要とし、両役所それぞれで作成したが、とくに精細な絵図は御大工がおもに作成したようである。

表2 本丸周辺22地点の石垣高さ・ノリ

	地点名称 (筆者による名称)	高さ(h)	ノリ(n)	角度	1間=6尺として h/n
1	辰巳櫓南面	12間5尺5寸	6間3尺	63.5°	1.987
2	辰巳櫓東面下段	7間5尺	4間半8寸	59.5°	1.691
3	辰巳櫓東面上段	5間6寸	3間5寸	58.5°	1.654
4	丑寅櫓東面下段	2間2尺5寸	1間4尺5寸	54.5°	1.381
5	丑寅櫓東面中段	7尺			
6	丑寅櫓東面上段	4間2尺	2間1尺	63.5°	2.000
7	丑寅櫓東面最上段	8尺	3尺	69.5°	2.667
8	東丸付段上	3間4尺4寸	9尺8寸	66.5°	2.286
9	東丸唐門先	10尺	5尺	63.5°	2.000
10	東丸唐門長屋下	11尺5寸	1尺5歩	82.5°	7.667
11	弾薬庫入り口	3間2尺3寸	7尺7寸	69.5°	2.636
12	東丸付段口北面	6間1尺4寸	2間2尺4寸	68.5°	2.597
13	北面石垣中央	6間4尺9寸	15尺	69.5°	2.727
14	戌亥櫓台北面	3間4尺9寸	4尺5寸	78.5°	5.089
15	戌亥櫓台西面	3間4尺4寸	4尺5寸	78.5°	4.978
16	新埋門脇	2間1尺6寸	2尺3寸	80.5°	5.913
17	鉄門長屋下	2間1尺5寸	9寸3歩	86.5°	14.516
18	申酉櫓台	3間6寸	1尺3寸	86.0°	14.308
19	小櫓下	9間5尺4寸	4間1尺2寸	67.0°	2.357
20	小櫓・鎗間の中央	12間4尺6寸	7間3尺5寸	59.5°	1.684
21	鎗櫓下	12間半	6間5尺	61.5°	1.829
22	大鎗下	14間7寸	6間半5寸	65.0°	2.144

角度表記は三角比表により、中間数はすべて0.5単位で表した。

2 章 延宝「金沢御城絵図」と正保城絵図

1 城絵図史における寛文8年の意義

加賀藩の寛文・延宝期は、城絵図・城下町絵図史の黄金期といってよい時代であった。それを象徴する現存絵図は、寛文8年「加賀国金沢之絵図」（加越能文庫、以下では「寛文8年図」と略記する）である。増田荘登男⁽¹¹⁾・田中喜男⁽¹²⁾・矢守一彦⁽¹³⁾・油浅耕三⁽¹⁴⁾・北垣聰一郎⁽¹⁵⁾らの考察により、寛文8年作成とされ、絵図精度についても定評を得ている。前号「調査報告Ⅰ」で、寛文2～11年の修補願図は穴生の作成とみられるが、寛文7年修補願図は寛文8年図に近いので、寛文8年図の影響をうけたと指摘した。つまり、中山六兵衛のような御大工作成図から、直接または間接に穴生方が影響を受けたのである。前号で寛文8年図のような城の描き方を国絵図系図柄とし、城郭修補願図系の図柄と区別したが、寛文8年図の登場により、城郭修補願図も図柄の面で影響を受け、絵図精度が向上したことは城絵図史において特記すべきことと思われる。

上の2種類の図柄の模写とみられる年代不詳の絵図群を、普請会所系絵図として紹介したが（「絵図調査報告Ⅰ」の表4）、いずれも寛文期の城絵図（幕用図）が、何らかのかたちで模範とされており、寛文8年図の影響の大きさが理解できる。延宝5年、当時国絵図・城絵図作成に携わっていた横山外記は、金沢城内や算用場、江戸藩邸等において所蔵する幕用図等をリストアップし⁽¹⁶⁾、元禄国絵図作成中の元禄11・12年には担当奉行の塩川安左衛門らが、藩所蔵の城絵図・城下町図を調査し目録に書き上げている⁽¹⁷⁾。それらの中から国絵図や国境争論関係の絵図を除き、城絵図・城下町図を拾い出すと表3の通りとなる。

表3 寛文・延宝期における城絵図・城下町作成状況

城下町図				典 拠
1	正保4年	金沢御城并侍屋鋪町屋敷一紙絵図之写		延宝5年書上
2	正保4年	金沢御城并地割図		元禄11年書上
3	正保4年	同絵図	但此地割を以寛文八年之絵図出来と付札有之	元禄11年書上
4	正保4年	小松御城并侍屋鋪町屋敷一紙絵図之写		延宝5年書上
5	正保4年	小松惣絵図		元禄12年書上
⑥	正保4年	富山御城并侍屋鋪町屋敷一紙絵図之写	加越能文庫16・19・12 210×184cm	延宝5年書上
7	正保4年	大正持御城并侍屋鋪町屋敷一紙絵図之写		延宝5年書上
⑧	寛文8年	金沢御城并侍屋鋪町屋敷一紙絵図之写	加越能文庫16・60・85・86	延宝5年書上
9	寛文8年	小松御城并侍屋鋪町屋敷一紙絵図之写		延宝5年書上
⑩	寛文7年	小松地割之惣絵図	加越能文庫16・18・76 265×211cm	元禄12年書上
11	寛文8年	金沢之絵図	寛文8年被上候時分、御城外侍屋敷町屋敷正保四年絵図と替候分爲可入御覧仕立候彩之絵図	延宝5年書上
12	寛文8年	小松之絵図	寛文8年被上候時分、御城外侍屋敷町屋敷正保四年絵図と替候分爲可入御覧仕立候彩之絵図	延宝5年書上
13	延宝7年	延宝七年被仰付候金沢御城并侍屋鋪町屋鋪一紙絵図扣		元禄12年書上
14	天和2年7月	金沢御城并金沢廻侍屋敷町屋等之絵図	村金左衛門添書有	元禄11年書上
15	天和2年	御前之御扣四ツ折絵図 但金沢御城并侍屋敷之図	村金左衛門添書有	元禄11年書上
城絵図				
16	万治2年 同3年	御国江御越候御目付衆江被遣候金沢御城絵図之写		延宝5年書上
⑪	寛文2年	金沢御城石垣損候所御伺之絵図之写	金沢城絵図目録248・272号	延宝5年書上
⑫	寛文2年	小松御城石垣損候所御伺之絵図之写	加越能文庫16・18・72	延宝5年書上
⑬	寛文7年	金沢御城石垣損候所御伺之絵図之写	金沢城絵図目録249・273号	延宝5年書上
⑭	寛文11年	金沢御城石垣損候所御伺之絵図之写	金沢城絵図目録275号	延宝5年書上
21	寛文元年	金沢御城之絵図 石垣損所御伺の絵図	此絵図寛文元年丑正月小幡宮内方より上ル	延宝5年書上
22	寛文2年	小松御城之絵図 石垣損所御伺の絵図	此絵図寛文2年寅6月前田三左衛門方より上ル	延宝5年書上
23	正保4年	金沢之絵図正保四年二被上候扣之内御城計之小絵図	但御城中之絵図御用之刻、御覧被成よきたため寛文8年二調置候小絵図二御座候	延宝5年書上

24	寛文 8 年	金沢之絵図寛文八年二被上候扣之内御城計之小絵図	但御城中之絵図御用之刻、御覽被成よきため寛文 8 年二調置候小絵図二御座候	延宝 5 年書上
25	寛文 8 年	金沢御城中地割之絵図	但寛文 8 年絵図被上候刻改申地割二而御座候	延宝 5 年書上
26	正保 4 年	小松之絵図正保四年二被上候扣之内御城計之小絵図	但御城中之絵図御用之刻、御覽被成よきため寛文 8 年二調置候小絵図二御座候	延宝 5 年書上
27	寛文 8 年	小松之絵図寛文八年被上候扣之内御城計之小絵図	但御城中之絵図御用之刻、御覽被成よきため寛文 8 年二調置候小絵図二御座候	延宝 5 年書上
28	寛文 8 年	小松御城中地割之絵図	但寛文 8 年絵図被上候刻改申地割二而御座候	延宝 5 年書上
29	寛文 8 年	金沢御城石垣之内堀櫓之絵取二而隠候石垣之分小絵図	但寛文 8 年絵図被上候刻右隠石垣之所為可入御覽仕立候小絵図二而御座候	延宝 5 年書上
30	寛文 8 年	小松御城石垣之内堀櫓之絵取二而隠候石垣之分小絵図	但寛文 8 年絵図被上候刻右隠石垣之所為可入御覽仕立候小絵図二而御座候	延宝 5 年書上
31	正保 4 年	金沢之御城之小絵図	23と同一か	元禄11年書上
32	(万治 2・3 年)	最前御国江御越候御目付衆御取候金沢御城絵図之写	16と同一か	元禄11年書上
33		金沢御城おこし絵図之写	但村金左衛門封印之俣	元禄12年書上
34		金沢御城東西南北間付		元禄12年書上

「延宝 5 年書上」は加越能文庫16・20-75、「元禄11年書上」は加越能文庫16・20 - 78、「元禄12年書上」は加越能文庫16・20 - 81¹⁹である。8 が、いわゆる寛文 8 年図「加賀国金沢之絵図」である。

ここに掲げた絵図のうち、これまでの調査で残存を確認できた絵図の番号に○印を付したが、現存していないものが多い。城下町図で現存するのは、富山の正保 4 年図、金沢の寛文 8 年図、小松の寛文 7 年図のみである。なお、金沢の延宝 7 年図（表 3 の13）は、前号で簡単に紹介した尊経閣文庫蔵「金沢御城絵図」に關係する城絵図とみられ、延宝 5 年国絵図と同時に作成されたとみて、前号で作成年代を延宝 5 年としたが、延宝 7 年と訂正する必要がある。尊経閣文庫蔵「金沢御城絵図」は城郭部分のみを描くので「延宝城小絵図」と略称することとし、その作成目的や特徴はあとで検討したい。

表 3 に現存しない幕用図が多数みえるが、城下町図では天和 2 年図が 2 枚あり、城絵図では、正保城絵図・寛文 8 年図から城郭部分のみを取り出した小絵図（表 3 の24・27）、堀・櫓の絵取で隠れた石垣をとくに明示した小絵図（表 3 の29・30）、金沢城中地割絵図（表 3 の25）が寛文 8 年に作成されていたことが注目され、年不詳ながら金沢城の「起し絵図」や東西南北間数を記載した絵図が元禄以前に作成されていたことも注意しておきたい。

このように寛文 8 年には、現存の寛文 8 年図以外に、城だけの小絵図、石垣中心の小絵図などが寛文 8 年図の図様・図柄を基調に作成されており、寛文 8 年は加賀藩城絵図史のなかで、とくに重要な年であったことが了解される。

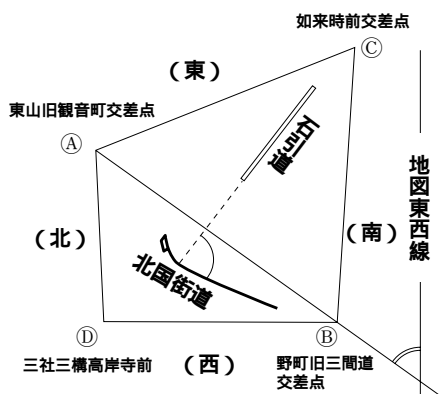
寛文 8 年図は、寛文 7 年「金沢図」(560cm×501cm)・「延宝金沢図」(590cm×545cm)と関連が深いことは、つとに指摘されてきたが、この 3 絵図を実見すれば、それは直ちに看取できる。しかし、この 3 絵図の原本はいずれも大型図で同時に閲覧することは不可能であった。ところが『金沢市史』資料編19において大型別刷図が添付されたことで簡便に比較可能となった。また、同書の増田莊登男氏の調査報告で、絵図精度の検討がなされ、寛文 7 年金沢図と延宝金沢図の縮尺は690分 1、寛文 8 年図は1150分 1 と解明され、三千分 1 の航測地図と精度比較されたのは貴重な成果であった。だが690分 1 という縮尺は落ち着きの悪い数値で、1 間 = 6 尺 9 寸の分間図ということになる。縮尺については、再調査が必要であろう。ただし、絵図精度を考えると、仮説として690分 1 という数値は利用できる。表 4 で増田氏の調査データをもとに、上記 3 絵図の精度を再検証してみた。

現在の 1 万分 1 図および増田氏が利用した 3 千分 1 航測地図を基準図とし、増田氏が比較のため設定した 4 地点 (A～D) 間の計測値 (cm) に縮尺倍率 (増田仮説の690) をかけて距離数をもとめ、寛文・

表4 寛文7年図・延宝金沢図と現代地図との精度比較

		AB 間	AC 間	AD 間	BC 間	BD 間	AB 線・ 東西線角度	北国街道・ 石引道角度	絵図サイズ (cm)
	3 千分 1 図での距離 (m) : A 1	2574	2400	1512	2412	1998			
	1 万分 1 図での距離 (m) : A 2	2570	2400	1510	2410	2000	51.6°	53°	
寛文 7 年 図	図上長さ (cm) B・角度	371	348.5	215	348	287	53.5°	54°	501×560cm
	B×690 (m) K	2560	2405	1484	2401	1980			
	A 1 - K	14	- 5	28	11	18			
	A 2 - K	10	- 5	26	9	20	1.9°	1°	
	平均誤差率	0.5%	0.2%	1.2%	0.4%	1%	3.7%	1.9%	
延宝 金沢 図	図上長さ (cm) B	372	347	218.5	348	287	48°	55°	545×590cm
	B×690 (m) M	2567	2394	1508	2401	1980			
	A 1 - M	7	6	4	11	18			
	A 2 - M	3	6	2	9	20	3.6°	2°	
	平均誤差率	0.2%	0.3%	0.2%	0.4%	1%	7%	3.8%	
寛文 8 年 幕用 図	図上長さ (cm) B	232.2	211.5	133.5	198.3	165	47.2°	48°	344×362cm
	B×1150 (m) : K	2670	2432	1533	2280	1898			
	A 1 - K	- 96	- 32	- 21	132	100			
	A 2 - K	- 100	- 32	- 23	130	102	4.4°	5°	
	平均誤差率	3.8%	1.3%	1.5%	5.4%	5.1%	8.5%	9.4%	

『金沢市史 資料編18 (絵図・地図)』所収表2 (73頁、増田荘登男作成) に追記加工したもの



延宝期の絵図との誤差を調べた。その結果、寛文7年金沢図および延宝金沢図の誤差率は1%以下となり、両城下町図の精度の高さを再確認できた。しかし、寛文8年図は、5%前後の誤差があり両城下町図より精度が劣る。また増田氏が行ったAB線と地図の東西線との角度比較のほかに、江戸前期以来変化のない、城下町の基本的な直線街路である石引道と北国街道(香林坊—堤町間)の角度を比較したが、やはり寛文8年図の精度は両城下町図より劣る結果となった。

三絵図の相互関係については、増田氏の作成した「金沢城下図系統図」が参考になる。つまり、寛文7年金沢図と延宝金沢図は藩用図として作成され、幕用図として作成された寛文8年図とまず区別される。藩用図としての両城下図は、城部分は空白であるが、城下町については藩士屋敷・主要寺院・惣構・堀・道路・用水路・下屋敷地・足輕組地などが色分けされ、文字記載も豊富である。寛文7年金沢図の凡例に「小松より引越并金沢者被下屋敷、先規絵図之表直シ申候事、但、此絵図最前子ノ十月切二仕置候所、其より末相渡候屋敷之分、重而相改、寛文七年十月迄、所々渡替人々屋敷書記申候」と記すので作成事情は明確である。つまり、寛文7年図は小松からの引越藩士と金沢在住藩士に下付した屋敷地を明示した城下町絵図(先規絵図)の改訂版であって、改訂前の先規絵図は、利常死去(万治元年)の2年後の万治3年(子年)10月までの状況を記載したものであった。その後寛文7年10月までに屋敷地の「渡し替え」があったので、寛文7年10月時点までの変動を本図に記載したのである。したがって、本図の前に「万治3年金沢図」が存在したことになり、その改訂版が寛文7年金沢図であった。

延宝金沢図は、寛文7年金沢図と縮尺・図柄が同じでサイズや精度も近似し、図柄上の大きな相違は道路中央の朱線がない点だけである。もっとも、記載された約1900名の藩士名や寺院について、寛文7年金沢図の藩士名と比べると、いくつか変更がみられ、延宝金沢図の作成時までの変動を盛り込んだ絵図であるとわかる。不十分ではあるが、寛文7年金沢図と比較してみると、延宝2年頃の作成と判断できる⁽¹⁸⁾。したがって、延宝金沢図は、寛文7年から延宝2年までの武家屋敷等の変動を掌握・記載した延宝初年作成の城下町図であり、万治3年図の2度目の改訂図といえる。延宝金沢図の凡例が基本的に寛文7年金沢図と同じであり、「小松より引越并金沢者被下屋敷、先規絵図之面直シ申候

事」と記すことも証左となる。

このような絵図凡例および絵図内容から、万治3年・寛文7年・延宝初年と順次作成された金沢城下町図は、武家屋敷地の配分と管理を担当する普請会所が作成させた藩用図であることは明らかであり、なかでも現存の寛文7年金沢図は、測量線である朱線を道路中央に引き精度も他に優れているので、基本となる測量図もしくはそれに最も近い絵図とみてよからう。しかも、その作成時期は、寛文7年10月以後、寛文8年図作成以前となり、寛文8年に作成された可能性も考えられる絵図である。寛文8年図作成にあたり影響を与えたことは間違いなく、その影響の度合いが問題となる。

寛文8年図は、藩用図でなく幕用図として準備されたものであり、先行する正保4年城絵図の図様に準拠しなければならないという制約をうけていたので、まずは幕府規定の絵図仕様にのっとり、寛文7年金沢図にない城郭部分の鳥瞰図が描かれ、城下町部分は、街路で仕切られた空間を侍屋敷・町屋敷・寺屋敷・侍下屋敷・足輕屋敷・蔵屋敷・馬場と表記し区分した。山王(安江)・天神(田井)・神明(野町)・八幡(卯辰)の四つの宮屋敷の記載は平面図のみであり、鳥瞰建物で描く正保城絵図と図柄が異なる。また、天徳院・如来寺・経王寺・宝円寺の4カ寺の固有名詞を記すのも正保城絵図と異なるので、むしろ寛文7年金沢図の影響とみるべきであろう。

しかし、いっぽうで寛文7年金沢図・寛文8年図ともに惣構(土居)を「ろくしょう色」、堀・用水を水色にしているが、これは正保城絵図でも確認されるので、寛文7年金沢図の影響というより、寛文7年金沢図が正保城絵図の影響を受け同色を採用したといえる。寛文7年金沢図は、正保4年城絵図を十分意識して作成されたのであり、幕用図が藩用図に影響を与えたことにも注意しておきたい。表3の11・12は、寛文8年作成の金沢・小松の城下町図だが、侍屋敷・町屋敷の配置について正保4年城絵図と寛文8年図の間の相違を明示するための絵図であり、ここから、正保4年城絵図と寛文8年図との間に何らかの異同があったことは間違いない。つまり、寛文8年図は、正保4年城絵図の改訂を意図しており、改訂作業の一環として、寛文7年10月から翌年にかけて城下町侍屋敷図の改訂図である寛文7年金沢図が、実測調査をもとに作成されたのではないか。

しかし、寛文8年図の全体の図様は、正保城絵図の図柄・図様に合わせる必要があり、寛文7年金沢図と正保金沢城図の融合をはかった結果、出来たものは、寛文7年金沢図より精度の劣るものになったと思われる。現存の寛文8年図と寛文7年金沢図の街区を比較すると、似てはいるが距離や方角が微妙に異なる箇所が多いのは、上記のような事情が要因と考えられる。その点で、延宝金沢図は総構を真っ黒にし、寛文8年図から全く自由に、寛文7年金沢図を踏襲しかつ改訂しているので、これこそ純粋な藩用図といえる。

1章で考察した3枚の地割図も、江戸後期の精度に優れた「御城中巻分碁絵図」と比較すると表5のごとく誤差が少なく、寛文8年図の城の姿に近いので⁽¹⁹⁾、上記の寛文8年図や幕用図と関連のふかい藩用図といえる。しかも「金沢城内絵図」(B)は寛文期に作成され、歴博「金沢城絵図」(A)や加越能文庫「金沢城中地割絵図」(C)も、寛文・延宝期からさほど遠くない江戸前期の精細絵図であり、寛文8年作成の絵図群の影響下で作成されたとみてよい。このように寛文・延宝期、なかでも寛文8年は城絵図史・城下町絵図史のうえできわめて重要な年であったといえる。

なお、寛文7年金沢図・延宝金沢図の絵図精度について付言するなら、その一部分を取り出し現在

表5 地割図と江戸後期絵図との比較(25頁写真参照)

	寛文8年図	「金沢城絵図」 歴博	金沢城中地割図	江戸後期「御城 中巻分碁絵図」
1 いもり堀軸と百間堀角度	72°	71°	71°	72°
2 いもり堀軸と鼠多門角度	136°	102°	109°	135°
3 新丸南北堀と二の丸北堀の角度	107°	102°	105°	103°
4 河北門と石川門の軸線角度	56°	62°	56°	66°

の地図と比較すると誤差の大きい所が散見される。この点は、金沢工業大学の谷明彦氏・増田達男氏らの延宝金沢図の復元的研究のなかでも確認されているところであり、両城下町図は、高低差のある地区などで誤差が大きくなるが、城周辺や川辺などでこうした誤差を飲み込み、全体的に均整のとれた絵図に仕上げた結果、誤差の少ない絵図になったものといえよう。したがって、両城下町図の絵図精度が優れているというのは、絵図全体のバランスがとれているという意味で、実用的な作図技術の巧妙さに拠っていた。測量方法や作図道具が決して高度であったわけではなかろう。

2 寛文8年図と正保城絵図

金沢城の幕用図については、国絵図調進に伴い提出した城絵図（ア）では、正保4年城絵図が現存せず、寛文8年の「加賀国金沢之絵図」二鋪が現存するのみである。しかし、この寛文8年図は幕府提出目的で作成されたものの、正式に提出されないまま藩庫に格納されたもので、未発の幕用図であった。巡見上使・国目付提出の城絵図（イ）では、万治2年・3年図の写が2本、正保城絵図とともに延宝5年まで城内土蔵に存在したことが明らかだが現存していない（「古より公儀江被上候御城絵図・御国絵図改申品々之帳」『金沢城研究』創刊号52頁、2003年）。現存する幕用図の大半は城郭修補願図（ウ）に該当するもので、その控もしくは写6種8枚について、前号で考察したところであった。

さて従来より、正保城絵図と寛文8年図は同一系統にあると指摘されているが²⁰⁾、ここで、寛文8年図と現存しない金沢の正保城絵図との関係について考えてみたい。

まず、富山の正保4年城絵図と寛文8年図を比べると大きな違いがある。富山の正保城絵図は「越中国富山古城之図」（加越能文庫）という標題をもち、加賀藩関係の現存唯一の正保城絵図であるが、石垣・土居・堀のみで、石垣上の櫓・長屋・塀など建物は一切描かない。これは金沢の寛文8年図と異なるだけでなく、内閣文庫所蔵の63点の正保城絵図とも異なり、何か特別の事情が考えられる。富山の正保城絵図に「越中国富山古城絵図松平肥前守（利常）領分之内 松平淡路守（利次）当分罷在候」と書かれた所に、特別の事情が露呈している。つまり、正保4年の加賀藩領は、本藩（長男光高）領80万石、隠居利常領22万石、富山藩（二男利次）領11万石、大聖寺藩（三男利治）領7万石の4つに分割されていたが、富山藩の前田利次の居城は、隠居中の小松城主前田利常領内の富山に臨時的に置かれていたのである。富山は利次にとって他藩領であり、臨時の居城であったため、このような古城図として、正保城絵図が仕立てられたとみられる。

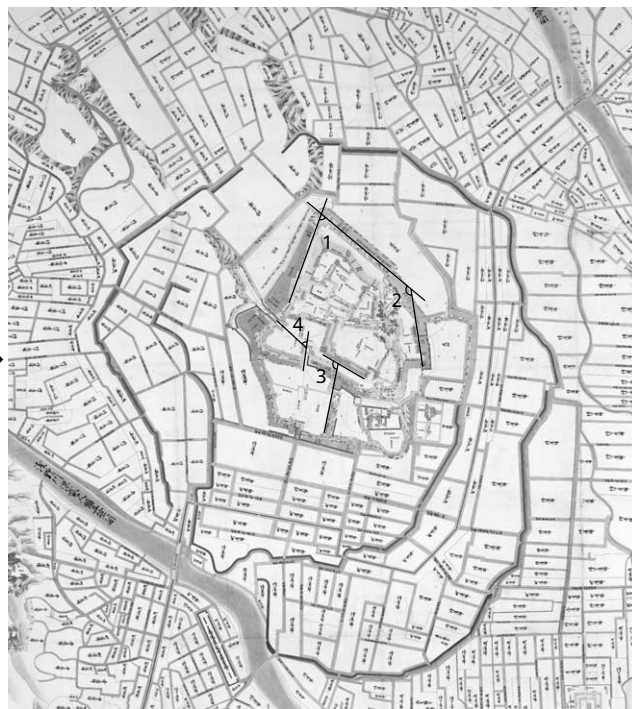
【史料2】²¹⁾

「一、三ヶ国之内、先年所々^{（端）}は城不残御わり被成候内、若至爾今、御家礼之者被召置所御座候而、堀・屋敷・構・侍町など有之所者別紙之絵図壹枚宛御上可被成事、
一、^{（前田利次）}淡路様・^{（前田利治）}飛驒様御在所之儀不及申、別紙絵図御上可被成候、最前失念候而、御両所様御在所絵図之儀申残候かと、重而被仰渡由之事、
一、右者国々之内二小身成衆五人三人有之候へ者、其在所々々不残名々二絵図被上候間、其並二御上被成候様二との儀二候事、
右条々、明日井上筑後殿へ三浦勘右衛門・遠藤数馬被召寄被仰渡候、以上、
戌十一月二十三日

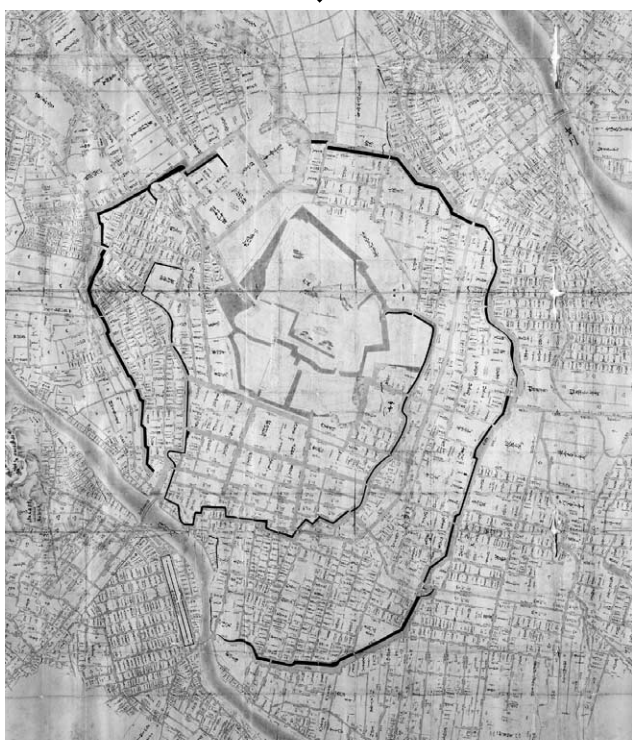
これは、正保3年11月23日に江戸の加賀藩邸から国元に送られた某書状写であるが、正保国絵図・城絵図作成担当奉行宛に、幕府の絵図奉行（井上筑後）の意向を伝えたものである。1条目に「先年所々端城残らず御割りなされ候うち」とあるのは「城破り」の実行を示す貴重な文言で、加賀藩関係古文書では初見といってよいであろう。それに続き、一旦「城破り」を行ったのち家来を配置したり、堀・屋敷・構・侍町などを擁する城があるなら別紙絵図を1枚ずつ作れと指示している。この指示をうけ小松城や富山城の城絵図作成が必須となったのであるが、2条目で「淡路様（利次）・飛驒様（利治）」



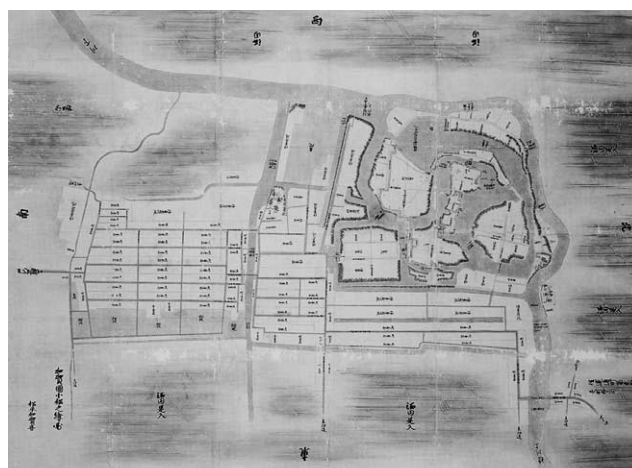
「寛文7年金沢図」(石川県立図書館蔵)



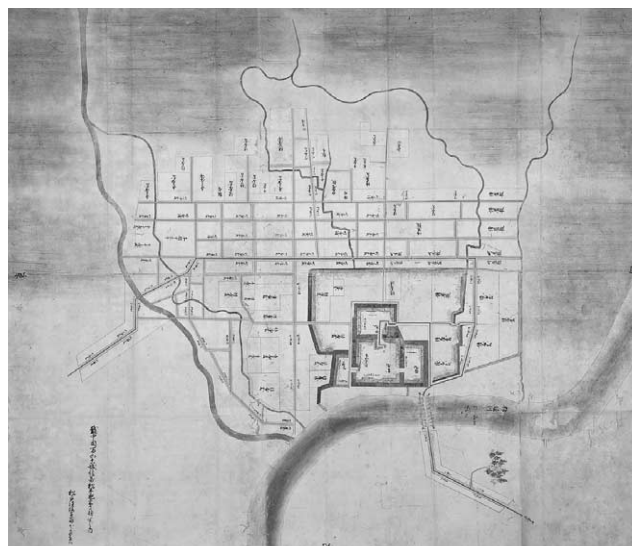
寛文8年「加賀国金沢之絵図」(金沢市立玉川図書館蔵)



(延宝2年)「延宝金沢図」(石川県立図書館蔵)



寛文7年「小松御城中并侍屋舗町共之絵図」
(金沢市立玉川図書館蔵)



正保4年「越中国富山古城之図」
(金沢市立玉川図書館蔵)

御在所の儀は申すに及ばず、・・・重て仰せ渡さる由のこと」とし、提出のなかった利次居城（富山城）・利治居城（大聖寺城）について「失念したのか」といって催促した。3条目でも、支城の城絵図作成の一般原則を解説しつつ、だめ押しで督促している。この書状が原因で、上記の「越中国富山古城之図」ほか、表3に掲げた大聖寺・小松の正保城絵図（表3、城下町図の4～7）が作成されたのであるが、図柄は古城・支城であるがゆえに、金沢の城絵図と異なる仕様が採用されたのではないか。

小松の寛文7年図が現存するが、これも富山の正保城絵図と同様、城の建物が全く描かれない。おそらく小松の寛文7年図と正保城絵図はほぼ同じ図柄であったと推定されるので、富山城と小松城の正保城絵図は、ともに城建物は一切略した同じ図柄であった。それは、あくまでも小松城が隠居中の利常の居城であり、加賀藩の本城でなく端城であったためで、古城に準ずるものとされたからだろう。富山城は、万治3年の領地替えて富山城下町とともに富山藩領に編入され、名実ともに富山藩の居城となるが、小松城は利常死後も、城代・城番が置かれ、支城として維持された（『新修小松市史』資料編1）。

このように、支城や他藩領に置かれた仮城の場合、幕府指定の正保城絵図の図様が採用されなかったものと考えられる。これは加賀藩だけの事例なのか、他藩の事例との照合が必要となる。したがって、金沢の正保城絵図の復元において、富山や小松・大聖寺の正保城絵図は直接参考とはならない。そこで、上掲のような、正保城絵図の仕様について指示した書状によって検討したい。

正保国絵図は正保3年に下絵図作成があり、同4年に能登・越中の2国分が幕府に提出されたが、加賀国分は遅れて慶安2年に幕府に提出された⁽²²⁾。城絵図は、表3の絵図標題に従い、正保4年に完成され提出したとみておくが、実際の提出時期はさらに検討していく必要がある。

江戸詰の家老今枝民部や森権太夫などから国許の奉行たちに送られた絵図仕様等を指示した書状写が11点残っており⁽²³⁾、城絵図に関する部分を以下に摘記した。

【史料3】 正保2年12月17日今枝民部書状（絵図担当奉行奥村源左衛門ら10名宛）

「 （前 略）

(9) 一、御城絵図大形能候、やくら・門・長屋・堀・石垣以下委細絵図可有之旨、御奉行衆御好候、いづれの城も同前之事」

(10) 一金沢惣たみ絵図あまり大過候間、今度参り候より少ちいさく候而も可然候八ん哉之事

右之通、御奉行井上筑後殿・宮城越前殿より此度重而御好如此候、最前御奉行衆御好之頭書、辻平丞・山本又四郎江葭田内膳相渡候、勿論両様共二不残無相違様二絵図并帳可調旨、所被仰出也、」
正保2年12月17日今枝民部書状（同上）

「 （前 略）

(11) 一、最前御奉行衆より頭書二城之外かさミの処、絵図二可書載之由有之候、河内丸など高き所、被書落間敷事、

(12) 一御城廻、前々より有之古城なと八、縦浅候共、如何にもふかき様二可被書載事、
（堀力）

(13) 一、近年之新堀八縦ふかく候とも、浅き様二可被書載事、
所被仰出也、

年不詳9月11日某書状（井上筑後殿御好の「国絵圖書様之覚」）

(1) 一、城廻やくら・門・堀のおほひ、瓦ふきの処八か八らふき、板おほひ八板おほひと絵図二書分并書付二も可仕事、

（中 略）

(7) 一、城廻深田・沼・かた田畠等可書記事、」

年不詳8月16日森権大夫（祐知）書状（宮木采女・辻平丞・奥村源左衛門宛）

(1) 「金沢御城御本丸・二三之丸、其外惣構迄方角ク記候絵図、当月四日之御状被副候而被指越候、埒

明申体二御座候而、御絵図出来次第為書付可申候旨、御絵図奉行小寺甚右衛門・佐分利儀兵衛被申候、

正保城絵図の記載様式については、佐賀藩の正保元年の絵図仕様書の記述が精しく⁽²⁴⁾、城郭に関する記載原則を要約すれば、(1)本丸・二の丸・三の丸の間付け、石垣土手の長さ・高さ、堀の高さ、櫓等を書付け、瓦堀・板堀などの違いを明記する、(2)堀の深さ・幅・長さ、(3)天守の規模・石垣台高さ、(4)城より地形高い場所を明記する、となるが、金沢城に関する指示のうち、の9条目、の11条目、の1条目、など一致する。の10条目によれば、正保2年に、大き過ぎるので小さくと指示されるほど大型の城絵図を作ったことがわかる。現在の兼六園付近に当時屋敷をもっていた奥村河内邸付近を「河内丸」と呼んだのも興味深い。また、堀の深さは実態通りでなく古堀は深く新堀は浅く書けという指示や、本丸・二三丸・惣構までの方角を記載した添図を参考に出させた点も注意したい。

しかし、こうした図様指示の文言だけでは金沢の正保城絵図の特徴はさほど明確とならなかった。図柄の特徴については隔靴搔痒の感があり、残存する63点の正保城絵図と寛文8年図を比べるしかない。63点の正保城絵図の図柄はどれも、堀や街路のラインを実際以上に直線的に表現し、城郭の縄張りも同様に直線的に単純化しており、それが正保城絵図独特の図柄となっている。金沢の寛文8年図の場合、上述のように地図として一定の精度をもつ寛文7年金沢図の影響を受け、現地形を比較的正確に描いた城下町図であった。しかし、金沢の正保城絵図は、63点の正保城絵図のような直線表現を主とした絵図と推測され、図柄においては寛文8年図とは相当異なるものであったと考えられる。次に「延宝城小絵図」によって、この点を検証してみたい。

3 延宝「金沢御城絵図」と正保城絵図

前号で延宝5年に幕府提出用の城絵図が作成されたと指摘したが、表3に掲げた「延宝7年被仰付候金沢御城并侍屋舗町屋舗一紙絵図扣」という絵図名から、延宝7年作成と訂正しなければならない。この延宝7年城絵図に関連して作成されたのが、ここで紹介する「金沢御城絵図」(274号、尊経閣文庫蔵、「延宝城小絵図」と略称)である(写真は17頁)。

本図は159×152cmの彩色図で、図柄の面では寛文8年図(写真25頁)と共通点が多いが、城下町を全く描かない所が大きく異なる。ところが、本図に作成目的などを記した長文の付札があり、正保城絵図・寛文8年図との相違について言及する。また絵図本体には、朱貼紙・黄色・青色等の色分けがあり、その凡例が付記されるので、作成目的が明瞭にわかる。まず、長文の付札と凡例の全文を掲げておこう。

【史料4】「金沢御城絵図」付札

「 覚

- (1)一、今般仕立申同絵図式枚八、寛文八年二有之石垣・櫓・堀・柵等不残記、右之節無之分八指除申候、就其、寛文八年絵図と此度仕立候絵図と違之所可入 御覧ため、此小絵図委細二仕候事、
- (2)一、御城之外侍屋敷・町等之義八、寛文八年二有之通、其節之絵図二も記申候故、此度も絵図違無御座候事、
- (3)一、土留八大形押立候石垣二而八無御座候故、正保四絵図之格を請、寛文八二も間尺八記不申候、寛文八年二書添申土留石垣も、輕キ腰石垣等二御座候故、石形さへ記置候へ八宜との御詮義二而其通二仕候、右之分茂今度仕立申絵図二八惣並二致彩記申候事、
- (4)一、土留石垣少二而も高キ分八、間尺記可申儀かと奉存、今般書付仕候、堀下等式三尺計之石垣二八間付二及申間敷儀かと、如跡々大形八記不申候、然共所二より裏石垣なと八、三尺二而も間付不仕候へ八、わかち見へ兼候所八記申候事、

- (5) 一、寛文八年絵図被上候時分より御座候石垣之内、右之節指除申候ハ過半土留ニ而御座候、押立候石垣洩申候ハ無御座候、但、玉泉院様丸御泉水、御本丸之方段々石垣御座候、是ハ先年より度々被上候絵図、植込ニ絵取、石垣ハすくなく御座候、寛文八ニも其通ニ可仕由ニ付、石垣あらハに無御座様ニ絵取仕申候、然共余程高間之石垣ニ御座候故、今度仕立申絵図ニハ植込之絵取すくなく仕、石垣見へ申候様ニ仕、高間記申候事、
- (6) 一、石垣高間并長間、正保四と過分ニ違候分ハ、寛文八絵図ニ茂無指引ニ記申候、石垣見面と申、間尺ニ而記申格ニハ御座候へ共、其二而ハ正保四ニあい不申候へハ、下墨ニ而之間尺ニあわせ書付仕所も御座候、其故高間惣並ニ違申所一兩所御座候、此所も今度仕立申格ニ御座候へハ、改間之通記可申儀と奉存、見るつらの間尺記申候、就其寛文八絵図之間尺よりハ此度少違御座候、右違申所、則此小絵図ニ付紙仕候事、
- (7) 一、御城中東西南北間付、寛文八絵図被上候刻改候ハ、正保と違申所も御座候、然共中墨少はつし申程之心得ニ仕候へハ、正保四ニあい申故、最前上ケ申小絵図付紙ニ書記申通、同敷ハ正保ニあわせ可然との儀ニ而其通ニ記申候、今度仕立申絵図ハ、諸事無指引仕立可申格ニ付、先年私共改申間尺記申候事、
- (8) 一、堀幅并水深、正保四年とあい申所御座候故、寛文八之絵図ニも其所々ニ記申候、堀之内ハ取所ニより深サ少宛替り申儀ニ御座候故、其堀之内間尺中分ニ記申候、且又堀幅之義、土居縁出入御座候所ハ、是以取所ニより替り申候故、寛文八ニも正保四之格を請、中分ニ記申候、但正保四と寛文八と過分ニ違候所ハ、寛文八絵図ニも改間之通記申候、左候へハ、水深・堀幅共ニ寛文八之通違無御座候ニ付、右□分ハ此度も寛文八之通ニ記申候、但、三之丸橋爪堀幅壱ケ所ハ、正保四ニあい申様ニ堀底之間尺記申故、惣並堀縁之間尺よりハ違御座候、就其、此度仕立絵図ニハ惣格之通、堀縁之間尺記申候、右違之所、絵図ニ付紙仕候事、
- (9) 一、御城中御家并御土蔵等ハ、先年より絵図ニ記無御座ニ付、此度勿論指除申候事、」

【史料5】「金沢御城絵図」凡例

「 石垣彩之覚

- 一、青彩之石垣 寛文八年絵図ニ記在之分
- 一、黄彩之石垣 寛文八年絵図ニ記不申、此度仕立候絵図ニ書添申候分

堀櫓柵彩之覚

- 一、青彩之堀櫓 寛文八年絵図ニ記在之分
- 一、黄彩之堀柵 寛文八年絵図ニ記不申、今般仕立絵図ニ書添申候分
- 一、朱紙附申分 以来可被仰付由ニ而寛文八年絵図ニ堀・柵絵取御座候へ共、其節より今以堀柵無御座候ニ付、此度仕立絵図ニ指除申分
- 一、朱星仕付紙ハ 正保四絵図ニ櫓形御座候分、其外以来可被仰付由ニ而、寛文八絵図ニ櫓之絵取御座候へ共、其節より今以無御座候故、此度絵図ニさし除申分

右之外

- 一、朱染紙付札ハ 寛文八絵図ニ正保四絵図之書付を請、其格ニ仕候へ共、違御座候故、此度絵図ハ寛文八改候通無指引記申候分

上掲付札の⁽¹⁾にある「今般仕立て申す同絵図式枚」というのが、今度新調した幕府提出絵図であり、上述の「延宝7年被仰付候金沢御城并侍屋鋪町屋鋪一紙絵図」(表3)のことと思われ(以下では「延宝城絵図」と呼ぶ)。その延宝城絵図2枚には「寛文八年にこれ有る石垣・櫓・堀・柵等は残らず記し、右の節これなき分は指し除き申候」とあるので、延宝城絵図は寛文8年図を土台とする絵図であるとわかる。それに続き「それにつき寛文八年絵図と、この度仕立候絵図と違いの所を御覧に入れるべきため、この小絵図を委細に仕り候事」と、本図(延宝城小絵図)の作成意図を述べる。つまり本図は、

延宝城絵図2枚と寛文8年図(2枚現存する)との違いを、藩主(綱紀)に示すため作成した「小絵図」であった。延宝城絵図2枚は、おそらく現存の寛文8年図と同じ350×370cm クラスの大型図であり、本図はその5分1程度なので「小絵図」といったのであろう。

付札の(2)で「御城の外、侍屋敷・町等の義は、寛文八年にこれある通り、その節の絵図にも記し申候故、此度も絵図に違い御座なく候」と記すので、延宝城絵図の図柄は、寛文8年図と同じで、城下町の侍屋敷や町屋敷を描くとみて間違いはない。延宝城小絵図は、主に城郭部分の相違点を藩主に説明するため、城だけ取り出したものだが、そのような小絵図は寛文8年にも作成されており(表3参照)、寛文8年の先例になったものである。

付札の(3)以下では、寛文8年図との相違点が詳細に説明されるが、同時に「石垣の高さ間ならびに長さ間、正保四と過分に違い候分は・・・」(6)とあるように正保4年城絵図との相違や関連についても言及しているので、寛文8年図と正保城絵図との違いが見つかるかもしれない。まずは、付札(3)~(8)および絵図凡例で述べられたことを整理しておこう。

(ア) 本図の石垣・塀・櫓・柵は、青色もしくは黄色に彩色されるが、青色は寛文8年図に描かれた通り延宝城絵図も踏襲した箇所、黄色は寛文8年図になく延宝城絵図で新たに書き添えた箇所である。

(イ) 本図の塀・櫓・柵に「朱紙」を貼り付けた所は、仰付によって寛文8年図に描かれたが、寛文8年以来該当する塀・柵がないので、今度の延宝城絵図で削除した所である。また「朱星仕付紙」は正保4年図に櫓形が描かれていた箇所で寛文8年図でも櫓を描くが、以来いまだに櫓がないので今回削除した箇所である。「朱染紙付紙」は、正保絵図の書付を受け寛文8年図でも踏襲したといいながら実際は違っている箇所で、今回は寛文8年図の通りとした箇所である。

(ウ) 土留石垣の多くは目立たないものなので「正保4絵図の格」により、寛文8年図でも石垣の間尺は記さなかったが、少し高さのある石垣については「間尺記し申すべき儀かと」存じ今回は追記した。しかし、塀下の2~3尺の石垣等の間尺は書かなかった。但し、裏石垣で「わかち見え兼ね候所」には3尺程度でも間尺を書き込んだ。

(エ) 寛文8年図作成時から存在する石垣で略したのは土留石垣がほとんどで、「押立て候石垣」で書き漏らしたものはない。しかし、玉泉院丸庭園から本丸(付段)に続く段々石垣(色紙短冊石垣など)は、これまでの絵図では植込みで隠していたが、「よほど高間の石垣に御座候ゆえ」今度仕立てる絵図では植込みを少なくし石垣が見えるように描き、高さ間尺も記した。

(オ) 石垣の高さ・長さ規模は、「正保4と過分に違い候分」は、寛文8年図との照合なしに(現状寸法を)記した。(補足すれば)「石垣の見る面と申すは、間尺にて記し申す格」なのだが、その通りにすると正保4年の記載と異なることとなるので「下墨にての間尺に合わせ書き付け仕る所」もあった。それゆえ石垣高さが違う箇所が1、2ヶ所あるが、それが今度の絵図作成基準なので、今度改めた間尺の通りとし「見るつらの間尺」を記した。したがって、今度の絵図では寛文8年図の間尺と少し違うが、違う箇所はこの小絵図に「付け紙」をほどこした(6)。

(カ) 城中各所の南北・東西の間数付けは、寛文8年図作成時に改定したので正保4年図と異なる所もあるが、「中墨少しはづし申すほどの」違いなので、正保4年図と整合させられる。最前上申した小絵図の付紙に書いた通り、「同じくは正保にあわせ然るべきとの儀」なのでその通りに記した。

(キ) 堀幅・水深は、正保4年図と合致しており、寛文8年図も所々に記載する。但し、計測地点によって誤差があるので、「中分」つまり平均値を記した。寛文8年図も、「正保4の格を請け中分に記した。なお、正保4年図と寛文8年図で大きく異なるときは、寛文8年の改定間数を採用したので、水深・堀幅とも今回は寛文8年図通りとなった。例外は橋爪門前堀幅だけで付紙をしてある。

このように延宝城絵図と寛文8年図・正保城絵図との相違を説明するが、(オ)の内実は、史料原文の解釈が難解で真意がわかりにくい。しかも、この付札・凡例文言と絵図内容を比べると矛盾がある。たとえば、青色と黄色の石垣区分について、寛文8年図と比べると、寛文8年図に記載された石垣でも黄色にされた箇所がいくつもあり、黄色石垣の凡例説明と矛盾する。また、松原屋敷・玉泉院丸、新丸の南北堀や九十間長屋下堀前などにみられる「朱紙附」箇所すべて、寛文8年図に塀柵記載がないので、凡例の説明と完全に矛盾する。なお、「朱星仕付紙」「朱染紙付紙」箇所は大半剥落しているので比較できなかった。このような矛盾から、延宝城小絵図を作成したとき参照した寛文8年図は、現存の寛文8年図ではないとせざるを得ない。現存の寛文8年図は、延宝城小絵図作成者の見た寛文8年図とは別物で、現存のものは延宝城絵図の図柄により接近したものといえる。場合によっては延宝城絵図であるかもしれない。寛文8年図の作成経緯について、今後さらに検討を要する結果となった。

上記の(ア)~(キ)から、正保城絵図と寛文8年図との相違をあげると、以下の通りとなる。

- (1) 寛文8年~延宝7年に現存しない櫓がいくつか正保城絵図に描かれていた。しかし、本図に元来添付されていたはずの「朱星仕付紙」が剥落しているので、該当する櫓を特定することはできない。
- (2) 石垣の高さ・長さ規模について、正保城絵図とその後の城絵図との間に差がある箇所がいくつかあった。
- (3) 城内各曲輪に書かれた東西・南北の間数記載は、寛文8年に改定があったので、正保4年図と違う箇所があった。

このように、文字記載に関する相違がわかるが、図柄上の違いは、櫓について述べるのみで史料4・5からも十分解明できない。しかし、(カ)(キ)によれば寛文8年図作成時に何らかの「改定」があったことは間違いなく、表3の城絵図25「金沢御城中地割之絵図」の注記で「寛文8年絵図上げられ候刻、改め申す地割にて御座候」と記述することも裏付けとなろう。なお、正保城絵図と寛文8年図とが同じ図柄であるとする説の根拠は、正保4年「金沢御城并地割図」(表3の3)の「但し、この地割をもって寛文八年の絵図出来と付札これあり」という注記であるが、この絵図標題では根拠とはならない。つまり、ここでいう「地割図」は城下町部分を指すと考えられるので、正保城絵図の城下町部分のみ寛文8年図が倣ったと解するのが妥当であろう(ここでの地割図は史料用語であり、1章で提起した地割図とは別物である)。その結果、寛文8年図の城下町部分の精度が、寛文7年城下町図より劣ることになったのではないか。

延宝城小絵図をもとに、正保城絵図と寛文8年図との相違を探り、これを手がかりに正保城絵図の復元を試みたが、十分な成果を得ることは出来なかった。しかし、寛文8年に何らかの改定があったことが、ここでも確認され、それが絵図史における画期性と関連することは上述から察知できる。

寛文8年図は、正保城絵図の図様を基本的に継承していることは間違いがないが、新たな測量図である高精度の寛文7年金沢図の影響を受け、城内を測り直し一定の改定がなされた結果、現存の63点の正保城絵図独特の直線的な図柄と異なる寛文8年図の図柄が生まれたのである。

したがって、正保城絵図と寛文8年城絵図が同一系統に属するとするとの指摘は、図様については一応妥当とせねばならないが、図柄についてはあてはまらず、また寛文・延宝期の絵図史上の変化、とくに寛文8年前後における作図技術が反映された精度の高い絵図であったことに注意すべきことをここで強調したい。また、幕用図としての城絵図には、必ずしも城の実情がそのまま描かれないことも同時に明らかになったといえよう。

3章 二の丸図の概要と二の丸御殿図の編年

1 二の丸図の分類と概要

金沢城の二の丸を描いた絵図は、平成14年度以来現在(平成17年2月末日)までの絵図調査により総

数190点を確認した。その目録は、本報告の最後に付表「所蔵者別二の丸図目録」として掲げた。今後の継続調査で若干の増加は期待でき、とくに儀礼関係図は相当な数でまとまって発見される可能性がある。これまで確認した二の丸図はどれも、様々な図柄をもち用途も多様であったが、作成目的による分類の(3)軍学関係図(縄張図)および(4)景観案内図(鳥瞰図、細見図)に該当するものはなかった。なお平成3年『金沢御堂・金沢城調査報告書Ⅰ(金沢城史料編)』の「金沢城関係絵図等資料目録」(以下「平成3年目録」と略記)において「金沢城二の丸図」と区分した絵図のうち59・63・71・72・73・83・89・94・99号(いずれも金沢市立玉川図書館蔵)・230号(石川県立図書館蔵)は金沢城の二の丸御殿図とする確証がなく、竹沢御殿・金谷御殿・江戸藩邸もしくはその他の武家屋敷の間取とみるべきものであったので削除した。また、襖紙の絵柄見本の冊子(平成3年目録227号)、文化の二の丸御殿造営時の障壁画家名・画題を記録した冊子(平成3年目録53号、228号)等も絵図目録に馴染まないので割愛した。

幕用図の一つとして、宝暦5年2月に作成された幕府巡見上使提出用の建物等色分図10枚組図(平成3年目録25号)を前号に掲げたが、その中に含まれる二の丸御殿全図も幕用図である。しかし、この25号二の丸御殿全図と同系の写図が、後述のように3点あり、相互比較のため、本図は、ここでは二の丸御殿全図の一つとみて考察したい。25号も作事所作成のものであり、幕府用に転用しただけであるから、この場合図柄・図様から幕用図・藩用図という違いは出てこない。このほかの二の丸図もおおむね藩用図に分類でき、大きく普請会所系(甲類)・作事所系(乙類)と、年寄以下の諸奉行および藩士が二の丸御殿での役目や儀礼に対応するため作成したもの(丙類)に大別できる。

甲類「普請会所系」には、地割図系統の全域図の二の丸だけの部分図(78号・6号 など) および石垣積みに関する説明図(穴生方後藤家文書の石垣構築技術に関する絵図67・69・167・168・173・174号)などが入り、甲類以外は、大きくみれば作事所で作成された絵図、もしくはそれを転写した派生図とみられる。とくに作事所作成図を模写した御殿内の部分間取り図に、朱線や付札を加え、座列や儀礼手順を書き入れた無彩絵図が89点あったが、これを「儀礼図」と総称し丙類とした。作成目的が作事所のそれと異なり、御殿内での儀式や政務を行うさいに必要な情報を書き付けた儀礼マニュアルで、絵図というより文書に近い側面をもつからである。作事所作成図(乙類)を分類すると、二の丸御殿全体の平面図、御殿一部の間取図、御殿以外の建物平面図のほか、御殿内外の諸建物の立面図や起絵図などがあり、多彩であった。文字記載が皆無のものもあるが、部屋名のほか戸・障子・天井等建物の仕様を記入したもの(指図類)が多く、文字情報も多様であった。前号で考察した建物等色分図と同系統の彩色御殿間取図は、乙類を代表する二の丸御殿平面図なので、このタイプの御殿間取図(全図・部分図とも)を乙1類とし、御殿内外の諸建物の立面図・起絵図などは乙2類とした。このいずれにも分類しがたいものを乙3類とし190点を分類したが(付表「所蔵者別二の丸図目録」参照)、これを所蔵者別に整理すると以下の通りとなる。

表6 所蔵者別の二の丸図概要

所蔵機関	合計点数	甲類	乙1類	乙2・乙3類	丙類
金沢市立玉川図書館	123	7	31	35	50
県立歴史博物館	8		8		
県立図書館	6		6		
金沢大学附属図書館	3		3		
前田土佐守資料館	7		1		6
富山県立図書館	1		1		
横山家	6				6
河内山家	27				27
松井建設本社	9		8	1	
合計	190	7	58	36	89

で、乙類を代表する御殿全図の文字記載を紹介しながら、編年案を次に示したい。

二の丸図は全域図に比べ、文字記載の豊富なものが多く、文字情報から同一図柄であっても用途の違い、作成年次の違いが判明することがあり、図柄・図様と作成目的との関連性は全域図ほど強くない。むしろ個々の絵図の文字情報から、作成年や作成目的がわかるので、文字記載を解読・考察したうえで編年しなければならない。そこ

2 二の丸御殿図の編年

上の二の丸図分類で、乙類の作事所系平面図・指図等は58点となったが、うち御殿全体を描く平面図は38点(表7表示32件)あり、これに中奥・表など御殿の部分間取図等9点を加えたものを当面、絵図編年の対象としたいと考え表7に掲げた。このうち、文化7年の二の丸再建時までの御殿全図15点(表7の1~15)について、景観年代および作成(書写)年代、作成事情がある程度解明されたので、ここで紹介し、表7の記載順・景観年代をもって編年案としたい。文化8年以後の江戸後期の御殿全図等については、今後の課題となる。

まず、宝暦9年大火以前(江戸前期)の二の丸御殿全図6点について個々に所見を述べ、編年理由を示しておきたい。すでに前号「絵図調査報告Ⅰ」2章で江戸前期建物等色分図A~C類の年代比定に関連し言及しているが、さらにこの時期の御殿全図を1点追加できたので、重複するところもあるが、前期建物等色分図A~C類と御殿全図6点の関係を再整理し、江戸前期における二の丸御殿の変容過程を確認したい。

(1)45号「金沢城二之丸座舗之図」：元禄以前の二の丸御殿

本図は元禄7~10年の二の丸御殿御居間廻り・御広式改築、部屋方増築以前の間取図で、17世紀後半の二の丸御殿の様相がわかる一級資料である(前号「絵図調査報告Ⅰ」)。まず文字情報から紹介しよう。

絵図裏の標題「元禄年中 二御丸御座舗図 全 土州公ヨリ」

絵図右上の詞書「二ノ丸御広式、元禄年中マテノ御絵図写」

「二御丸惣御屋形絵図、但御居間廻并御小書院等建替り不申以前之絵図二御座候」

の「土州公ヨリ」は、前田土佐守家(藩年寄、加賀八家の一)より入手し手写したとの意と推定され、伝来において信頼のおける絵図で、で御広式は元禄期までの姿であると断る。また「御居間廻り」(藩主の執務・生活空間、江戸城の中奥に相当する空間なので本論では「中奥」という表現も併用)と小書院などは、建替以前の御殿図であると記載するが、次にみる207号によれば、御居間廻り・小書院(白書院付近)を「新宅」すなわち改築後の建物とし、本図と異なる平面プランを描くので、元禄7~10年の二の丸御殿の増改築以前の絵図と推定した。

したがって、本図は寛永8年創建の二の丸御殿に最も近い平面全図といってよく、さらにいえば元禄7年以前、五代藩主綱紀の初入国(寛文元年)以後の二の丸御殿間取図とするのが妥当であろう。その特徴を、その後の二の丸御殿図と比較してみると、建坪は現存二の丸御殿全図のなかで最も小さく、御広式(御座敷)と表御殿・御居間廻りが完全に離れ、数寄屋敷に建物(部屋方)がまだなく、御居間先の庭に馬場がない点が注目される。また裏口門は「切手門」(1章で閑説)とされ、御殿内の部屋呼称も、後掲表8のごとく宝暦以後の呼称と異なっていた。

(2)207号「金沢城座敷之図二之丸」：元禄改築直後の二の丸御殿

本図は大鑑コレクションの中の一冊であるが、「朱引之通道筋、青紙御新宅、黄紙御古屋」という注記があり、御居間廻(中奥)と白書院付近、数寄屋敷の部屋方が青紙であり、約900坪ぐらいの元禄の増改築箇所が明瞭である。元禄の増改築で、数寄屋敷に部屋方が新築され、中奥が御広式と棟続きとなり、御殿が拡充されたことが本図から確認できるが、表御殿は変化がなかった(前号「絵図調査報告Ⅰ」)。白書院の改築で「楽屋御長屋」と廊下続きとなり、「御納戸」「御茶挽所」が増設された点も注意しておきたい。宝暦5年以後の御殿図では、白書院(小書院)周辺に奥書院・松の間がみえるが、207号と45号に見えない。本図作成以後、宝暦年間までに増築されたものであろう。田中徳英氏のご教示によれば、「松の間」の初見は正徳年間とのことなので、45号および本図は正徳年間以前の御殿図といえよう(本紀要の田中徳英論文参照)。45号・207号および宝暦5年図(25号)における部屋名称の

表7 二の丸御殿全図一覧

編年順	平成3年目録 番号・(枝番)	描写範囲	景観年代	個別標題	彩色	法量 (縦×横)	所蔵者・所蔵機関	文庫名・旧蔵者など	作成年・写年代・備考
宝暦9年以前 二の丸御殿図									
1	45	御殿全図	元禄7年以前	金沢城二之丸座敷之図	彩色	166×120	金沢市立玉川図書館	加越能文庫	
2	207	御殿全図	元禄10年増築以後	金沢城座敷之図二ノ丸	彩色	83×65	石川県立歴史博物館	大鑑コレクション	
3	25 ①	御殿全図	宝暦5年2月	二之御丸御家廻り并御広式等 絵図(10枚組図「金沢城図」 のうち)	彩色	80×111	金沢市立玉川図書館	氏家文庫	氏家栄太郎写
4	237 ③	御殿全図	宝暦5年図系	御家廻り図(14枚組図「金沢 御城中絵図」のうち)	彩色	54×59	石川県立図書館		
5	61	御殿全図	宝暦5年図系	二ノ丸御殿図	彩色	72×84	金沢市立玉川図書館	大友文庫	寛政4年写
6	64	御殿全図	宝暦5年図系	屋敷間取図	彩色	77×82	金沢市立玉川図書館	大友文庫	
宝暦再建以後、文化5年以前									
7	60	御殿全図	宝暦13年頃	宝暦年中二之御丸御殿地指図	無彩	115×203	金沢市立玉川図書館	大友文庫	
8	46	御殿全図	天明7年	文化焼失以前二の丸之図	彩色	136×257	金沢市立玉川図書館	加越能文庫	
9	47	御殿全図	寛政5年	二之丸御殿御広式御絵図	彩色	96×181	金沢市立玉川図書館	加越能文庫	
10	新	御殿全図	寛政5年	金沢表二之御丸御殿并御広式 御絵図	彩色	179×90	村松家		
文化5～7年再建時の二の丸御殿図									
11	48	御殿全図	文化6年4月	二之丸御殿絵図	無彩	80×54	金沢市立玉川図書館	前田貞醇旧蔵	文化6年4月26日
12	新	御殿全図	文化6年4月	金沢城二の丸御殿図	無彩	80×55	石川県立歴史博物館	篠原一宏家	文化6年4月26日
13	新	御殿全図	文化6年5月	二ノ丸御屋形図	無彩	272×140	前田土佐守家資料館		文化6年5月
14	51	御殿全図	文化6年5月	金沢城二ノ丸之図	無彩	140×260	金沢市立玉川図書館	前田貞醇旧蔵	
15	49	御殿全図	文化6年12月	金沢城二之丸御殿図	無彩	100×52	金沢市立玉川図書館	前田貞醇旧蔵	文化6年11月写
文化7年再建以後									
	新	御殿全図	文化7～12年	二ノ御丸絵図	無彩	105×152	金沢大学附属図書館		文化13年正月写 嶋野(印)
	50	御殿全図	文化7年以後	金沢城二ノ丸絵図面	彩色	87×137	金沢市立玉川図書館	郷土史料	文化8年以降
	52	御殿全図	文化7年以後	金沢城二之御丸御殿明細図	彩色	140×70	金沢市立玉川図書館	郷土史料	本瓦・棧瓦の区別
	54 ①	御殿全図	文化7年以後	金沢城二之丸御住居殿間図 二之丸全図(縮尺約1/200)	彩色	80×168	金沢市立玉川図書館	氏家文庫	
	54 ②	御殿分割図	文化7年以後	金沢城二之丸御住居殿間図 二之丸全図(三分割図) 3枚	彩色	80×56	金沢市立玉川図書館	氏家文庫	
	57 ①～④	御殿分割図 (4枚)	文化7年以後	二之御丸御殿並御広式下部屋 等絵図 表御式台より竹之間 迄 御台所より柳之御間まで(縮 尺約1/200)	彩色	40×54	金沢市立玉川図書館	清水文庫	
				滝の御間・波の御間ヨリ御居間 廻り御広式廻りり迄(縮尺約1/200)		52×55			
				御広式下壇廻り(縮尺約1/200)		33×43			
				橋爪御門櫓5 正建御殿		28×40			
	58	御殿全図	文化7年以後	金沢城二之丸御殿之図	彩色	96×116	金沢市立玉川図書館	後藤文庫	
	210	御殿全図	文化7年以後	金沢城二ノ丸絵図	彩色	66×144	石川県立歴史博物館	村松家	
	211	御殿全図	文化7年以後	金沢城二ノ丸絵図	彩色	74×126	石川県立歴史博物館	2 - 947	
	212	御殿全図	文化7年以後	金沢城二ノ丸絵図	彩色	130×255	石川県立歴史博物館	2 - 1355	「金沢市史」別刷14
	236	御殿全図	文化7年以後	二之丸御建物平面図	無彩	78×132	石川県立図書館	富田文庫慈雲寺本	
	233	御殿全図	文化7年以後	文化中造首金沢城二之丸諸建物図	彩色	90×53	石川県立図書館	森田文庫	嘉永7年11月湯浅本写
	新	御殿全図	文化7年以後	金沢城二之丸図	彩色	72×130	石川県立図書館		
	新	御殿全図	幕末	金沢城二之御丸三歩碁之図(2枚)	彩色	86×124	石川県立図書館	屋根伏せ図と間取図	鹿嶋所持(印)
	262	御殿全図	文化7年以後	二の御丸惣御絵図 (三歩碁)	彩色	75×143	金沢大学附属図書館	昭和2年松本正雄 寄贈。四高蔵書	山本左助写
	263	御殿全図	文化7年以後	金沢城二の丸絵図	彩色	150×77	金沢大学附属図書館	新しい軸装	
	289	御殿全図	文化7年以後	金沢城二ノ丸御殿間取図	彩色	74.2×125.6	富山県立図書館		
	56	御殿表	文化7年以後	金沢城二之丸御殿間取図(縮 尺約1/200)	無彩	28×40	金沢市立玉川図書館	清水文庫	表向の一部のみ
	88	御殿表	文化7年以後	金沢城二之丸転席方絵図	無彩	79×53	金沢市立玉川図書館	加越能文庫	「転席方絵図」
	208	御殿表	文化7年以後	金城敷面之図	無彩	78×109	石川県立歴史博物館	村松家96	文政元年6月
	209	御殿表	文化7年以後	二ノ丸表向座敷等之図	彩色	56×48	石川県立歴史博物館	大鑑コレクション	
	55	中奥図	文化7年以後	金沢城二ノ丸御殿次内巨細絵図	彩色	176×243	金沢市立玉川図書館	加越能文庫	「御造営之頃之図」
	70	中奥図	文政3年	二之丸御殿御修補絵図(齊泰 相殿につき補修図)(100分1)	無彩	67×88	金沢市立玉川図書館	清水文庫	清水篤郷筆
	81	中奥図	嘉永年中	金沢城二之丸御次内嘉永年中 修補図(縮尺約1/150)	無彩	56×80	金沢市立玉川図書館	清水文庫	嘉永年中 御居間 先土蔵描かず
	68	中奥・広式図	文化10年	御広式向御二階之分絵図	彩色	80×100	金沢市立玉川図書館	加越能文庫	2階部分の張り紙 多し 文化11年5月写
	213	御殿・御広式	文化7年以後	金沢城二ノ丸奥部絵図	彩色	78×111	石川県立歴史博物館	2 - 1022	

表 8

45号（元禄7年以前）	207号（元禄10年以後）	25号（宝暦5年）
御式台	御色代	御式台
中式台	中御色代	裏御式台
なし	中門	実検之御間
大台所	大御台所	御台所
御黒書院	黒御書院	柳之御間
なし	御料理之間	檜垣御間
御白書院	白御書院	御小書院
切手御門	御門	御裏御門
楽屋御長屋	楽屋御長屋	御楽屋

が混用されており⁽²⁵⁾、黒書院・白書院の呼び名が天和～元禄期に併用されていたことがわかる。文献による部屋呼称変遷の考察は、今後の課題となるが、そこに藩主の意向がどのように関わるかなど検討すべきことは多い。「白書院」「黒書院」の使用時期が文献で特定できれば、本図および45号の景観年代はより明確となる⁽²⁶⁾。

(3)25号：宝暦5年「二之御丸御家廻り并御広式等絵図」

本図は上述の通り「金沢城図」10枚組図のうちの1枚であるが、原本でなく大正・昭和期の郷土史家である氏家栄太郎氏の写したものである。「二之御丸御家廻り并御広式等絵図」という題箋があり、絵図下に次のような付札があった。

「

覚

- 一、二之御丸大御書院上段下段
- 一、同竹之御間
- 一、虎之御間
- 一、矢天井之御間
- 一、実検之御間
- 一、御式台
- 一、瀧之御間
- 一、芙蓉之御間
- 一、御小書院
- 一、萩之御間
- 一、牡丹之御間
- 一、松之御間
- 一、奥御書院
- 一、薫之御間
- 一、檜垣之御間
- 一、柳之御間
- 一、御台所

(年寄前田直躬)
土佐守殿溜之由
備後守様御溜之由
(大聖寺藩主前田利道)

右、二之御丸御殿御表向御間数如斯御座候、以上、

亥二月 但、宝暦五年

右御城中御長屋并御檜簷御殿廻り御間数等御書上可

申旨、御城代ヨリ被仰渡候二付、二紙二相調上ル、

宝暦五年 亥二月十日

」

この付札から、この組図10枚は金沢城代の命をうけ、宝暦5年2月10日に城代方へ提出された建物等色分図であることが明瞭である。図様・図柄から作事所で作成し提出したことも間違いない。同年2

異同を表8で比較したが、45号・207号の間に共通性があり、25号とこの両図の間に大きな変化がある。絵図上に表れた部屋呼称の変化をもって、部屋呼称変更が画一的に行われたと断定はできないが、天和～元禄期の城内儀礼に関する文献に「柳の間」「小書院」「檜垣の間」と「白書院」「黒書院」

表 9

金沢御城中絵図14枚構成	金沢城図10枚構成
御家廻り（二の丸）	二の丸御家廻り・御広式
三の丸絵図	三の丸図
玉泉院丸様丸絵図	玉泉院丸様丸図
薪丸絵図	薪丸図
橋爪番所・御殿・諸方土蔵絵図	橋爪御門図
土橋御門・番所図	土橋御門図
越後屋敷絵図	越後屋敷図
下台所・会所・割場絵図	割場・会所・下台所図
金谷御広式絵図	金谷御広式
金谷番所・七正建御殿絵図	金谷番所・七正建御殿図
惣絵図	
東の丸・御本丸絵図	
御作事所絵図	
石垣惣絵図	

月4日、江戸より早飛脚が到着し、三月中に幕府巡見上使が派遣されるとの報せがあり⁽²⁷⁾、その一報をうけ本図作成が金沢城代から作事奉行に発せられ10日の提出にいったと推測される。かくも早い対応ができたのは、作事所に本図の元となる組図が常に架蔵されていたからであろう。

なお、巡見上使松平頼母・大河内善兵衛が金沢に到着したのは4月21日で、10月1日まで滞在し、能登・越中など領国監察のほか、城内建物の監察を行ったが、その間に城内の櫓・土蔵・長屋・狭間の調査を行い、武器在庫、家臣人数などを書き上げさせている⁽²⁸⁾。本図もその一環で作成されたものである。しかし、本図が実際に幕府巡見上使に提出されたかどうかは確認し得ない。本図のような詳細に部屋名を書き込んだ建物間取図が、幕府上使に本当に提出されたのか疑問も残るが、幕府用に準備したという意味で幕用図の一種としておきたい。図様・図柄は作事所系の藩用図で、その転用にすぎない。

石川県立図書館の「金沢御城絵図」14枚組図(237号)は、本図に近い建物等色分図の組図であり、両者の組図構成の相違を対照すると表9の通りとなる。城全体を描く惣絵図は、前号で指摘したように、本来この組図に照応しない建物等色分図B類に属する図柄をもち、もともとこの組図になかったものと考えられる。また石垣惣絵図は普請会所系の絵図であり、普請会所から提出されたものを作事所系の建物等色分図の組図とともに収納したため、この組図に紛れ込んだものと考えられる。これ以外の12枚が宝暦5年2月の組図(25号)と対応するが、氏家本(25号)にない「東の丸御本丸絵図」と「御作事所絵図」が県立図書館本(237号)にあり、県立図書館本は藩伝来のものである可能性もあり、こちらを善本とすべきと考える。しかし、氏家本の「二の丸御家廻り・御広式」図にあった上掲の付札は、県立図書館本になく、氏家は県立図書館本を写したのではなかった。

61号「二の丸御殿図」および64号「屋敷間取図」(いずれも、大友文庫金沢市立玉川図書館蔵)の図柄を観察すると、25号系統の二の丸御殿全図であると確認され、単独の御殿図として、宝暦5年の二の丸御殿図のみが模写されていた。ただ、御殿内の文字記載は25号・237号より少なく、部屋方が割愛されているので、図柄からは両組図の御殿全図に劣る。25号・237号・61号・64号の4枚は同一図柄の二の丸御殿全図であり、これを宝暦5年図系の御殿全図とすることができる。

建物等色分図C類に分類した「金沢城御殿絵図」(13号)の二の丸御殿を観察すると、宝暦5年図系御殿全図に近似する。違いは部屋方の間取りが一部異なる程度で、ほぼ同時期の景観と観察できたので、前号で、金谷御殿の変遷も勘案し13号C類絵図の下限を寛延3年(1750)とした。237号と13号には多くの付札があり、その文字記載は、下記の通りで、25号と同一箇所が多い。13号と宝暦5年図系との関連の深さはここからも傍証される。

表10

13号(C類)付札	237号(宝暦5年)付札	25号(宝暦5年)原図記入
実検之御間「御射手御異風御番所」	同左	実検之御間
柳之御間「御横目所」「御奏者番席」「組頭席」「御用所」「御祐筆部屋」	同左「御祐筆部屋」のみなし	同左
櫓垣御間「新番頭溜」「御使番溜」「新番御徒小頭并新番御徒溜」	同左	同左
薦之御間「若年寄中席」	同左	同左
松之御間「年寄中御家老役席」「年寄中内談所」「御城代付与力詰所」	同左	松之御間

一方で、部屋方間取の南側で明確な差異が確認され、25号の金谷御殿図と13号の金谷御殿の間にも明確な差異が認められるので、13号は宝暦以前の姿とした。よって宝暦5年図系の景観は、宝暦3年8月1日に「御新殿御上棟御規式」が行われたので、その御殿改築⁽²⁹⁾以後であることは確実といえる。なお、宝暦5年から宝暦9年の城焼失までの間は御殿改築の記録がなかった。

御殿全域図13号および宝暦5年の御殿全図と、207号つまり綱紀時代後半の御殿平面プランを比べると、白書院周辺と部屋方・御広式で大きな変化があったとわかる。すなわち、白書院(小書院)付

近で松の間・奥書院・年寄内談所が増築されており、部屋方と御広式も増改築され、中奥でも改築により御居間・御居間書院等の位置が変わり、桐の間・船の間などが新たに登場し、居間先にあった38間の馬場が縮小されている。建物等色分図C類に先行するA類でも「松の間」「奥書院」が書かれるので、松の間・奥書院の増築は、少なくとも六代吉徳時代（享保8年～延享2年）以前となるが、田中徳英氏の教示によれば、正徳以前となる可能性が高い。今後文献による裏付け調査が必要である。

建物等色分図C類に先行する景観年代をもつA類・B類について、前号で綱紀晩年（元禄10年～享保9年）から6代藩主吉徳時代の金沢城を描くと指摘したが、上述により、二の丸御殿平面プランは、45号→207号→A類→B類→C類→宝暦5年御殿図（25・237・61・64号）の順に変遷したといえる。写真（43頁）でみるとA類から宝暦5年図までは、御殿の部屋方や金谷御殿の変化が目につくが、表御殿・中奥・御広式の景観はさほど変化がない。

江戸前期の二の丸図の変遷をまとめると、45号は元禄以前の綱紀前期の御殿図、207号は元禄10年増改築直後の御殿図、A類・B類・C類は、綱紀晩年から吉徳時代の御殿で宝暦元年までの姿。宝暦5年図は、10代重教初期に行われた宝暦3年改築後の御殿を示すもので、これが宝暦9年に全焼した二の丸御殿であった。

次に、宝暦大火後文化5年火災まで、江戸中期の二の丸御殿図3種類4点についてみていきたい。

(4)60号：宝暦13年「宝暦年中二之御丸御殿地指図」

本図は御殿図を多数所蔵する大友文庫のなかの一本であるが、絵図の端裏書に「宝暦年中二之御丸御殿地指図 やね形、水はき樋砂溜」とあり、御殿の表式台や竹の間（大広間）・虎の間・実検の間・表能舞台が描かれていないことから、宝暦の再建時の絵図と確認できる。宝暦9年大火後の再建経緯は田中徳英氏の論考⁽³⁰⁾、『加賀藩史料』等で周知なので詳細は略すが、宝暦11年から本格化した御殿再建事業の結果、宝暦13年4月藩主重教は新築された御殿中奥（御居間廻り）に移った。本図端裏書の「宝暦年中」という年代は、図柄・文献記録等と矛盾はなく、宝暦13年4月に完成した御殿全図とみて間違いない。茶色で排水路、朱線で屋根形を示すので、作事所で作成した指図とみられ、御殿造営を指導した金沢城代もしくは造営奉行の手元に置かれたものであろう。屋根形を描いた朱線に寸法のほか「コノ軒、御式台下工通ル」といった説明もある。

宝暦13年の藩主入居以後も再建事業は続くが、その後変化した姿を描く46号・47号では、本図と異なる部屋方・御広式（橋の間など）が描かれ、表式台や虎の間が増築されている。三者を比較すると宝暦の御殿再建過程が具体的にわかる。

(5)46号：天明7年「文化焼失以前二之丸の図」

本図には標題・端裏書がないが、「安永三年実検之御間相建申候」「安永三年虎之御間相建申候」「安永三年御式台相建申候」という3枚の付箋と、「天明七年菱御櫓并御長屋六間相建申候」「天明七年御対面所辺御住居替被仰付候」「天明七年御居間辺御住居替被仰付候」という3枚の付箋が貼付されていた。安永3年の表式台・実検の間・虎の間、天明7年の菱櫓の竣工は周知の事実であるが、御広式の対面所辺、中奥の御居間辺の「御住居替」が天明7年になされたというのは本図が伝える新事実である。御住居替とは、改築の意味なのか、移住なのか検討を要するが、注意しておきたい貼紙である。絵図本体に書かれた部屋名や藩士身分などは47号と重なる所が多かったが、付箋の年号から、安永～天明期の御殿再建が終了した時点の景観を描くものであり、成立は二の丸菱櫓等が再建された天明7年とするのが妥当であろう。文献では五十間長屋・橋爪門続櫓の再建は天明8年とされるので⁽³¹⁾、天明8年以前の景観とするのが妥当であろう。五十間長屋と橋爪門続櫓が彩色されていないのは、未完であったためと推定される。47号では、五十間長屋・橋爪門続櫓・橋爪二の門などが彩色され、本図より再建が進捗した姿となっている。

(6)47号：寛政5年「二之丸御殿御広式絵図」

本図右上に「金沢表二之御丸御殿并御広式等御絵図 寛政五歳四月改之」とあり、右下の貼紙に

「一、御居間三間四方二重板敷アイニ糠入、
一、御用之御間式間半二三間 右同断之事、
一、御囲六尺二式間半 右同断之事、
一、御寝所三間四方 右同断之事、

右寛政五年二出来被仰付候事」とあり、その脇に「四歩一間之割」とあるので、寛政5年4月に改訂された二の丸御殿図であることは明確で、一間4分(150分1)の縮尺図であった。46号と比べると、虎の間から柳の間に斜めの廊下が増築され、五十間長屋・橋爪門続櫓・橋爪二の門が彩色されており、天明7年までの景観を描く46号より再建が進展したことがわかる。図柄からみて寛政5年とみて矛盾はない。また、上記の貼紙から、御居間・御用の間・御寝間の規模が明確にわかるが、二重板敷構造で板の間に糠を入れたのは、どういう効果をねらった工夫か検討を要する。なお、貼紙の脇で、朱太線は「最前無之所ニ相立候熨斗立并仮仕切之印」、黒太線は「熨斗立并掛塀、最前有之所ニ今般熨斗立等以下」と塀の凡例を記すが、抹消のため薄くなり見えかかっている。塀の形態が再建によってどう変化したか窺えるが、何かの事情で一旦抹消したのであろう。

以上3点のほか、表7に掲げた「金沢表二之御丸御殿并御広式御絵図」(村松家蔵)も宝暦の再建過程を描く絵図であるが、47号と図柄ばかりか標題・貼紙の文字記載まで同じであり、同系の写であった。絵図の彩色仕上げなどは47号のほうが丁寧であり、臨本であろう。

最後に、文化5年から7年にかけて行われた、二の丸御殿再建の最中に描かれた絵図を5点紹介するが、この5点どれも無彩絵図で、朱書きが入る程度であった。まずさきに標題・端裏書などの文字記載をまとめて掲げておこう。

(7)48号：文化6年4月「二之丸御殿絵図」加越能文庫

(端裏書)「文化六己巳四月二十六日御移徙之二之丸御殿図」

(8)新：文化6年4月「金沢城二の丸御殿図」篠原一宏家

(絵図右上)「文化五年五月廿九、初而木作立、十二ヶ月ニ而出来、
御居間先御土蔵八正月ヨリ取掛
文化六己巳御造営之御殿図

四月廿六日 御移徙被遊、但シ御小書院・竹之御間・大式台八末御出来無之」

(9)新：文化6年5月「二ノ丸御屋形図」前田土佐守資料館

(紙袋上書)「文化六年 二之御丸屋形図
己巳五月」

(10)51号：文化6年5月「金沢城二ノ丸之図」加越能文庫

(絵図右上)「二之御丸図」

(11)49号：文化6年11月「金沢城二之丸御殿図」加越能文庫

(端裏書)「文化五年五月廿九日、初而木作立、十二ヶ月ニ而出来、御居間先御土蔵八正月ヨリ取懸、
此節出来□フ

文化六己巳御造営之御殿図

四月廿六日御移徙被遊、但シ御小書院・竹之御間・大式台八、未御出来無之、已十二月不
残御出来」

(絵図右下)「御広式下之部屋方画図八本図之外、余図を以継足シテ故、本図ト下部屋方と間数ニ少々
違可有之、檀箱之处八大体二合ヒ候故継足候得共、其心得ニて可見候、間数八間違無之

候へ共、高ト下ノ間寸厘毛之違可有之与被存候、一図二与望候故、其処致改正、其心得
二て可見候事、^(カ)

已十一月写之 御作事奉行小堀左内^(カ)御広式画綱江借写ス、
この5点を図柄からみると、⁽⁷⁾⁽⁸⁾は部屋方と表能舞台がともに描かれず、同系統の絵図写である。⁽⁷⁾
⁽⁸⁾は文化6年4月の藩主斉広の御殿移徙時の絵図であると標題でうたっており、ともに文化6年4月
26日の藩主移徙にあたり作成された御殿全図である。その時点では表能舞台・表御殿等は未完であっ
た。⁽⁹⁾と⁽¹⁰⁾も細部に多少の違いはあるが同一系統の写本とみてよい。⁽¹¹⁾は⁽⁷⁾⁽⁸⁾と図柄は多少異なるが、
表能舞台は貼紙であるし、部屋方は絵図右下の説明で別図をもって継ぎ足したと説明するので、本来
は⁽⁷⁾⁽⁸⁾と同一系統の絵図である。⁽⁷⁾⁽⁸⁾図を基本に、それに表能舞台図や別図にされていた部屋方図を
組み合わせた合成図が⁽¹¹⁾である。また、⁽⁸⁾と⁽¹¹⁾の標題説明はよく似ているが、⁽¹¹⁾は文化6年12月にす
べて出来たという文言があり、一方で文化6年11月に作事奉行より借用し写したと記すので、成立は
文化6年11月で、端裏書は同年12月以後に追記したものであろう。⁽⁷⁾⁽⁸⁾には「已12月不残御出来」の
文言がなく、竹の間・虎の間・表式台付近の文字記載をみると、⁽¹¹⁾には障子・天井等の建物仕様に関
する書き込みが多くみられるのに、⁽⁷⁾⁽⁸⁾には全く記載がない点から、⁽¹¹⁾は文化6年4月以後の表御殿
の作事に関する指示を書き込んだ指図と判断される。

⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾の文字記載で特徴的なのは、表式台と五十間長屋石垣との間の距離を2箇所で測り「御玄関柱
ヨリ御石垣迄九間四尺計、但是迄拾間四尺計、指引シテ七尺計出申事」「御玄関柱ヨリ御石垣迄拾間
四尺計、但是迄拾貳間計、指引シテ七尺計出申事」と記している点である。文化の再建で玄関位置が
7尺ほど出て石垣との距離が縮まったことがわかるが、両図ともに、この文字記載があり、御殿二階
部分の貼紙の位置も一致するので、年紀不明の⁽¹⁰⁾も⁽⁹⁾と同じく文化6年5月図系の写とみることがで
きる。

以上にもとづき、表7に示したような絵図年代(編年)が確認されたが、今回の考察から除外した
江戸後期の御殿全図(彩色図)のなかには、表7の50号、52号など作成年不明ながら上掲⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾⁽¹¹⁾に近
い図があった。また金沢大学所蔵「二ノ御丸絵図」(「文化13年5月写之」「六歩四方一坪」とある6分系の無彩
色図)なども⁽⁹⁾⁽¹⁰⁾との関連が想定されるが、今後の検討で文化6年図との関連性を追求したい。また、
二の丸図編年に関する総括も次号に譲りたい。

<注>

- (1) 万治元年閏12月18日付の本多政長等藩年寄三名連署奉書に「津田玄蕃殿家早々明候而、量表替其外修理被申
付」(森田盛昌「自他群書」巻1)とある。
- (2) 津田系譜(「諸士系譜」巻10、加越能文庫)によれば、津田家は、津田刑部義忠(正勝)→玄蕃正忠→玄蕃
正真→玄蕃孟昭→玄蕃敬脩→玄蕃將順→玄蕃正昭→内蔵助政本と続くが、正真は「初内蔵助」、孟昭は「初
逸角・右兵衛・正郷」とある。寛文期に「故玄蕃」といえば正忠しか考えられない。
- (3) 石川県立図書館蔵、560×501cm、『金沢市史』(絵図編)別刷図12
- (4) 加越能文庫(金沢市立玉川図書館蔵)、森田文庫(石川県立図書館蔵)
- (5) 石川県立図書館蔵、590×545cm、『金沢市史』(絵図編)別刷図11
- (6) 「切手」は江戸時代、関所手形・通行証・営業許可証・入場券・商券などの語義があり(「日本国語大辞典」小
学館)、二の丸御殿出入りの町人・商人等が通行証を提示した通用門の意味で「切手門」としたのであろう。
金沢城の切手門は、絵図では数寄屋敷の部屋方の入口門の名称となっているが、数寄屋敷に部屋方が造成さ
れる以前に「切手門」と呼ぶのは不合理である。
- (7) 絵図の精度を江戸後期の「御城中宅分替絵図」と比較した表5参照。なお、本図が原本であるかどうかは確
認できなかった。古書店から入手した資料でなので伝来も不明だが、作事所架蔵の副本もしくはその写本と

みるべきであろう。

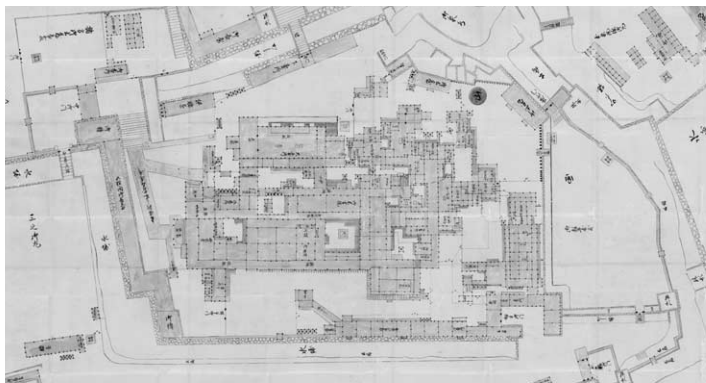
- (8) 284号「金沢御城内外御建物図」尊経閣文庫、前田育徳会蔵
- (9) 121号「金沢城本丸・東丸之図」加越能文庫（金沢市立玉川図書館蔵）は、文政13年の「御城中巻分碁絵図」の直前に作られた文化大火後の本丸平面図である。本丸の三階櫓横に15間6寸の長屋（乾場か）を描くが、それは文化7～13年の石黒家「金沢城内絵図」にのみ確認されることから、同じ頃のものだといえる。121号は建物等色分図の本丸部分図（作事所系）だが、本図は全く建物を書かない点で大きく異なる。しかし、絵図全体の仕上げ方はきわめて近似する。
- (10) 後藤彦三郎「秘伝書(2)高石垣等之事」（加賀藩穴生後藤文庫、金沢市立玉川図書館蔵）、『金沢城郭史料』334頁。
- (11) 「金沢城下 古図のしおり」（私家版、1962）
- (12) 「城下町古絵図について」（『金沢経済大学論集』7—1、1973）「城下町の成立・変容」（『伝統都市の空間論・金沢』弘詢社、1977）
- (13) 「金沢城下絵図史について」（『史林』62—3、1979）
- (14) 「『加賀国金沢之図』について」（『日本建築学会学術講演梗概集』1975）
- (15) 『石垣普請』7章（法政大学出版局、1987）
- (16) 「公儀へ被上候御城絵図御国絵図改申品々之帳」4冊（加越能文庫16・20—75、金沢市立玉川図書館蔵）拙稿「元和～寛文期の金沢城修築について」（『金沢城研究』創刊号、2003）参照。
- (17) 「御国絵図目録」（加越能文庫16・20—78、金沢市立玉川図書館蔵）「加越能御国絵図二関スル書類」（加越能文庫16・20—81、金沢市立玉川図書館蔵）
- (18) 蓮池に作事所があるので延宝4年以前、寛文9年に表門の位置を変えた宝円寺の姿が変更後となっているので、寛文9年以後とされるが、延宝2年に小松で死去した小松城代「前田三左衛門」を載せ、寛文13年（延宝元年）の代替わりで家督相続した深美右京を載せるので寛文13年以後延宝2年迄とみた。「延宝古絵図にみる町づくり」（『再発見！城下町金沢—まちなみと暮らし—』2001年城下町フォーラムレジメ集）参照。なお「延宝金沢図」の写本は、幕末から明治以後にかけ4種類作成されている。
- (19) 前期の金沢城地割図の精度を4箇所の角度で比較したのが表5である。距離精度については、比較に適した地点を設定し原寸調査をしなければならないので、今回は略した。今後、城絵図の精度を測る方法を検討する必要がある。
- (20) 増田前掲1962、田中前掲1973、1977など
- (21) 正保3年「絵図二付達書覚」（加越能文庫16・20—71、金沢市立玉川図書館蔵）
- (22) 野積正吉「正保加賀国絵図の特徴」（『加能史料研究』15、2003）
- (23) 「高辻帳并絵図御用二付江戸ヨリ来頭書写」（加越能文庫16・20—48、金沢市立玉川図書館蔵）
- (24) 正保元年12月22日「国絵図可仕立覚」（佐賀県立図書館蔵）
- (25) 『加賀藩史料』4・5
- (26) 本書掲載の田中徳英論文はこの点を考察した先駆論文である。なお、江戸後期の作成と推定される「金沢古城図」（235号、石川県立図書館蔵、富田文庫慈雲寺旧蔵）の二の丸御殿平面図に黒書院・料理の間のほか「梅之間之書院」が書かれ、本論で紹介した江戸前期のどの二の丸御殿図とも異なる平面プランを描く。45号や207号よりも古い御殿景観なのか、作為的要素の強い江戸後期の編纂物なのか疑問が残る。
- (27) 『加賀藩史料』7
- (28) 『加賀藩史料』7
- (29) 『加賀藩史料』7
- (30) 田中徳英「宝暦大火後の金沢城再建における造営組織について」（『日本建築学会計画系論文集』480号、1996年）
- (31) 『加賀藩史料』9
- (付記) 本稿作成にあたり、金沢城調査研究絵図・文献専門委員会、建造物専門委員会において助言を得た。

付表：所蔵者別 二の丸図目録

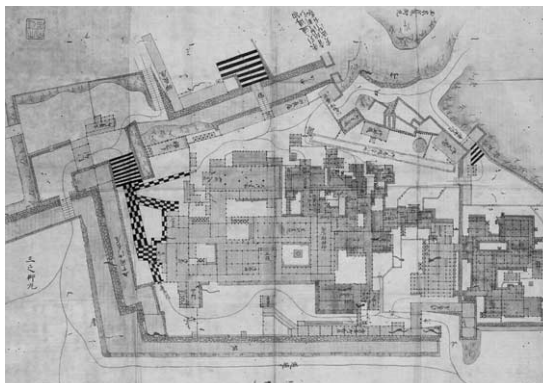
	1991 番号	1991 枝番	図法	個別標題（組図 呼称等）	彩色	法量1	法量2	所蔵文庫・旧蔵	分類
	1. 金沢市立玉川図書館所蔵								
1	6~8	③	平面図	二之御丸・御数寄屋屋敷(金沢城中地割絵図 甲~丙号)	彩色	111×187		加越能文庫	甲
2	9~12	②	起絵図	二之御丸(金沢城建物起絵図 甲~丁号)	無彩	189×128		加越能文庫	甲
3	25	①	平面図	二之御丸御家廻り并御広式(金沢城図)	彩色	80×111		氏家文庫	乙
4	45		平面図	金沢城二之丸座鋪之図	彩色	166×120		加越能文庫	乙
5	46		平面図	文化焼失以前二之丸之図	彩色	136×257		加越能文庫	乙
6	47		平面図	二之丸御殿御広式御絵図	彩色	96×181		清水文庫	乙
7	48		平面図	二之丸御殿絵図	無彩	80×54		加越能文庫	乙
8	49		平面図	金沢城二之丸御殿図	無彩	100×52		加越能文庫	乙
9	50		平面図	金沢城二ノ丸絵図面	彩色	87×137		郷土史料	乙
10	51		平面図	金沢城二ノ丸之図	無彩	140×260		加越能文庫	乙
11	52		平面図	金沢城二之御丸御殿明細図	彩色	140×70		郷土史料	乙
12	54	①	平面図	金沢城二之丸御住居殿閣図 二之丸御殿全図(縮尺約1/200) (金沢城二之丸御住居殿閣図)	彩色	80×168		氏家文庫	乙
13	54	②	平面図	二之丸御殿分割図1〔御広式・部屋方〕 (同上)	彩色	80×56		氏家文庫	乙
14	54	②	平面図	二之丸御殿分割図2〔御台所・大広間〕 (同上)	彩色	80×56		氏家文庫	乙
15	54	②	平面図	二之丸御殿分割図3〔橋爪門・五十間長屋〕 (同上)	彩色	80×56		氏家文庫	乙
16	55		平面図	金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図	彩色	176×243		加越能文庫	乙
17	56		平面図	金沢城二之丸御殿間取之図(縮尺約1/200)	無彩	28×40		清水文庫	乙
18	57	①	平面図	表御式台より竹之間迄 御台所より柳之御間まで(縮尺約1/200) (二之御丸御殿并御広式下部屋等絵図)	彩色	40×54		清水文庫	乙
19	57	②	平面図	滝の御間・波の御間ヨリ御居間廻り御広式廻り迄(縮尺約1/200) (同上)	彩色	52×55		清水文庫	乙
20	57	③	平面図	御広式下壇廻り(縮尺約1/200) (同上)	彩色	33×43		清水文庫	乙
21	57	④	平面図	橋爪御門櫓五正建御殿 (同上)	彩色	28×40		清水文庫	乙
22	58		平面図	金沢城二之丸御殿之図	彩色	96×116		後藤家文書	乙
23	60		平面図	宝暦年中二之御丸御殿地指図	無彩	115×203		大友文庫	乙
24	61		平面図	二ノ丸御殿図	彩色	72×84		大友文庫	乙
25	62	①	平面図	御能拝見之節出所等絵図 (御用番方御絵図)	無彩	20 5×29 5		大友文庫	丙
26	62	②	平面図	御能舞台拝見所絵図 (同上)	無彩	27 5×38 5		大友文庫	丙
27	62	③	平面図	御用之間江被召候節絵図 (同上)	無彩	21×30		大友文庫	丙
28	62	④	平面図	桧垣之間席絵図 弘化3年 (同上)	無彩	28×40		大友文庫	丙
29	62	⑤	平面図	桧垣之間席絵図 (同上)	無彩	21×30		大友文庫	丙
30	62	⑥	平面図	御奥書院図(諸大夫年寄中御家老役御判物頂戴所図) (同上)	無彩	28×45		大友文庫	丙
31	62	⑦	平面図	御奥書院図(年寄中家督等御家老役儀之御礼所) (同上)	無彩	33×50		大友文庫	丙
32	62	⑧	平面図	於御奥書院御使帰御目見人出所並御用番誘引出所等絵図 (同上)	無彩	22×29		大友文庫	丙
33	62	⑨	平面図	御大広間図(御弘之節出仕以上列居御絵図) 文化9年 (同上)	無彩	36 5×53 5		大友文庫	丙
34	62	⑩	平面図	松之間席絵図 安政2年 (同上)	無彩	28×48 5		大友文庫	丙
35	62	⑪	平面図	御広間御勝手図 (同上)	無彩	47×36		大友文庫	丙
36	62	⑫	平面図	鷹之御間図 弘化4年 (同上)	無彩	47×36		大友文庫	丙
37	62	⑬	平面図	於瀧之御間経書講釈御聴聞等之節絵図 (同上)	無彩	21×30		大友文庫	丙
38	62	⑭	平面図	御広間図(跡目立之節) 文化9年 (同上)	無彩	33×51		大友文庫	丙
39	62	⑮	平面図	御用之間江被召候節出所等絵図 安政5年 (同上)	無彩	30×21		大友文庫	丙
40	62	⑯	平面図	御居間書院図 文政7年 (同上)	無彩	47×35 5		大友文庫	丙
41	62	⑰	平面図	御居間書院江御出之節年寄中等出処等図 (同上)	無彩	46 5×35 5		大友文庫	丙
42	62	⑱	平面図	御大広間図(人持以下御判物御印物頂戴所) 文化7年 (同上)	無彩	33 5×51		大友文庫	丙
43	62	⑲	平面図	御小書院図 文化7年 (同上)	無彩	33 5×50 5		大友文庫	丙
44	62	⑳	平面図	虎之御間図(御目見外之人々御印物頂戴所) 文化7年 (同上)	無彩	28×40 5		大友文庫	丙
45	62	㉑	平面図	御小書院図(諸大夫年寄中御家老役御判物頂戴所) 文政3年 (同上)	無彩	34×51		大友文庫	丙
46	62	㉒	平面図	御間補理之図 (同上)	無彩	28×80		大友文庫	丙
47	62	㉓	平面図	飛騨守様御登城之節御座付所等之絵図 万延元年 (同上)	無彩	23×17		大友文庫	丙
48	62	㉔	平面図	同右 安政6年 (同上)	無彩	20 5×27		大友文庫	丙
49	62	㉕	平面図	叙爵之者罷出候所之絵図 文政7年 (同上)	無彩	24×35 5		大友文庫	丙
50	64		平面図	屋敷間取図	無彩	77×82		大友文庫	乙
51	65		平面図	御居間書院之絵図	無彩	47×34		成瀬正居旧蔵	丙
52	66	㉖~㉗	平面図	大広間御小書院披露方絵図 (仮綴11枚)	無彩	28×43		高島定辞旧蔵	丙
63	67		立面図	二之丸御居間先御土蔵御石垣縄絵図 文化5年	無彩	29×41		後藤文庫	甲
64	68		平面図	御広式向御二階之分絵図	彩色	80×100		加越能文庫	乙御広式
65	69		立面図	二之丸雁木坂横切合御石垣縄張之事	無彩	28×76		後藤文庫	甲
66	70		平面図	二之丸御殿御修補絵図(縮尺1/100)	無彩	67×88		清水文庫	乙中興
67	74		平面図	二之丸御居間書院絵図	無彩	37×24		加越能文庫	丙
68	75	①	平面図	姫君様御城外御出之節御行列御供建ヶ所絵図 (金沢城二之丸御守殿御供建方絵図)	無彩	108×78		加越能文庫	丙
69	75	②	平面図	姫君様初姫様御建込非常之節御立退御行列御供建方絵図(同上)	無彩	108×78		加越能文庫	丙
70	76		平面図	檜垣之間御絵図	無彩	32×46		加越能文庫	丙

71	77		立面図	金沢城二之丸御式台絵図（縮尺約1/20）	無彩	70×202	加越能文庫	乙2
72	78		平面図	二之丸御地面図 縮尺一分一間	無彩	28×39	加越能文庫	甲
73	79		立面図	二之丸腰掛図（縮尺1/10）	無彩	68×79	加越能文庫	乙2
74	80	①	立面図	縁側部分（金沢城二之丸御用之間御囲起絵図）	無彩	69×80	清水文庫	乙2
75	80	②	立面図	御用之間（同上）	無彩	30×39	清水文庫	乙2
76	81		平面図	金沢城二之丸御次内嘉永年中修補図（縮尺約1/150）	無彩	56×80	清水文庫	乙中興
77	82	①	立面図	御対面所御絵図御納戸構図（縮尺1/10図）（御対面所絵図）	無彩	42×65	清水文庫	乙2
78	82	②	平面図	御対面所基礎の石位置図（御対面所絵図）	無彩	53×67	清水文庫	乙2
79	84	①	立面図	御長屋庫（縮尺約1/10 立面図）（御居間先御長屋等絵図）	無彩	40×84	清水文庫	乙2
80	84	②	立面図	御厨子図（縮尺約1/5 絵図正面図）（御居間先御長屋等絵図）	無彩	52×39	清水文庫	乙2
81	85		立面図	檜垣御間絵図（縮尺約1/10）	無彩	104×184	加越能文庫	乙2
82	86	①	平面図	安永三年於檜垣之御間御判物被下候節之絵図（檜垣之御間絵図）	無彩	24×18	加越能文庫	丙
83	86	②	平面図	寛政九年御表小將撰之節御居間書院四ノ間絵図（檜垣之御間絵図）	無彩	37×26	加越能文庫	丙
84	87		立面図	柳之御間之図（縮尺約1/20）	無彩	55×89	加越能文庫	乙2
85	88		平面図	金沢城二之丸軋席方絵図	無彩	76×53	加越能文庫	乙
86	90	②	立面図	二ノ御丸橋爪御門脇御櫓妻絵図（二ノ御丸・桐木御門図）	無彩	81×115	大友文庫	乙2
87	90	④	立面図	二ノ丸橋爪御門脇御櫓平絵図（二ノ御丸・桐木御門図）	無彩	82×78	大友文庫	乙2
88	91		平面図	金沢城広式正月行事進退図	無彩	65×99	大友文庫	丙
89	92		平面図	金沢城広式料理場図	無彩	36×46	大友文庫	丙
90	93		平面図	上御台所総絵図	無彩	39×51	大友文庫	丙
91	95	①	立面図	御玄関地差図（御玄関絵図）	無彩	48×67.5	大友文庫	乙2
92	95	②	立面図	御玄関箱壇正面立差図（御玄関絵図）	無彩	55×68	大友文庫	乙2
93	95	③	立面図	御玄関立絵図（御玄関絵図）	無彩	129×134	大友文庫	乙2
94	95	④	立面図	御玄関軒廻り屋根裏と天井等絵図（御玄関絵図）	無彩	72×89	大友文庫	乙2
95	95	⑤	立面図	御玄関庫図（御玄関絵図）	無彩	86×108	大友文庫	乙2
96	96		平面図	於表御舞台御規式御能被仰付候御補理御絵図	無彩	74×155	大友文庫	丙
97	97		平面図	金龍院様御中陰御法事之節之絵図	無彩	56×40.5	大友文庫	丙
98	98		平面図	御楽屋等之図	無彩	40×56	大友文庫	丙
99	100		平面図	於御表御舞台御規式御能有之節披露絵図	彩色	40×84	大友文庫	丙
100	新		平面図	金沢二之御丸御殿並御広式等御絵図	彩色	179×90	村松家	乙
101	135	①	立面図	菱御櫓二階等階子建所図（金沢御城櫓等之図）	無彩	54×38.5	大友文庫	乙2
102	135	②	立面図	菱御櫓地指図（同上）	無彩	36.5×38	大友文庫	乙2
103	135	③	立面図	菱御櫓屋根指図（同上）	無彩	50.5×50.5	大友文庫	乙2
104	135	④	立面図	菱御櫓北之方同東之方図（同上）	無彩	28×60	大友文庫	乙2
105	135	⑤	立面図	五拾間長屋図（同上）	無彩	28×45.5	大友文庫	乙2
106	135	⑥	立面図	橋爪御櫓先年ノ建方御絵図（同上）	無彩	28×61	大友文庫	乙2
107	135	⑦	立面図	橋爪御櫓近年建方御絵図（同上）	無彩	28×54.5	大友文庫	乙2
108	135	⑧	立面図	橋爪御門唐舖割図（同上）	無彩	28×40.5	大友文庫	乙2
109	160	①	立面図	菱櫓絵図（金沢城菱櫓絵図等）	無彩	28×37	清水文庫	乙2
110	160	②	立面図	櫓及長屋の梁伏図と木推（同上）	無彩	29×42	清水文庫	乙2
111	160	③	立面図	部分略図（同上）	無彩	13×18	清水文庫	乙2
112	160	④	立面図	紡錘車之如き図（同上）	無彩	15×13	清水文庫	乙2
113	167		平面図	橋爪一之御門台並御櫓台御石垣積直指図絵図（文化5年）	無彩	42×109	後藤文庫	甲
114	168		平面図	橋爪御門御櫓台下石積之図	無彩	25×36	後藤文庫	甲
115	169		立面図	橋爪御馬廻御番所図（十分一立面図）	無彩	68×97	加越能文庫	乙
116	170		平面図	金沢城橋爪御門・鶴之丸堀鉄砲狭間之図	無彩	42×104	加越能文庫	乙
117	171	①	立面図	橋爪一之御門図三十分一（橋爪御門等御絵図）	無彩	77×27	加越能文庫	乙2
118	171	②	立面図	窓・段見取図（橋爪御門等御絵図）	無彩	30×22	加越能文庫	乙2
119	171	③	立面図	橋爪二之御門図三十分一（橋爪御門等御絵図）	無彩	39×96	加越能文庫	乙2
120	172		立面図	橋爪御門渡御櫓之図	無彩	24×58	加越能文庫	乙2
121	173		立面図	橋爪二之御門下鋪石式拾分一之図	無彩	70×82	後藤文庫	乙2
122	174		立面図	橋爪御櫓台御石垣積直出来曲尺合等之控絵図	無彩	43×98	後藤文庫	乙2
123	175	①	平面図	橋爪御門図起絵図4枚付（橋爪御門・金谷御馬場図）	無彩	28×40.5	大友文庫	乙
2 県立歴史博物館・県立図書館・金沢大学附属図書館等								
1	207		平面図	金沢城座敷之図二ノ丸（大聖寺藩文庫旧蔵、安永以前、西湾識）	彩色	83×65	県立歴博	乙
2	208		平面図	金城敷面之図	無彩	78×109	県立歴博	乙表
3	209		平面図	二ノ丸表向座敷等之図	彩色	56×48	県立歴博	乙表
4	210		平面図	金沢城二ノ丸絵図	彩色	66×144	県立歴博	乙
5	211		平面図	金沢城二ノ丸絵図	彩色	74×126	県立歴博	乙
6	212		平面図	金沢城二ノ丸絵図	彩色	130×255	県立歴博	乙
7	213		平面図	金沢城二ノ丸奥部絵図	彩色	78×111	県立歴博	乙副式
8	新		平面図	金沢城二の丸御殿図	無彩	80×55	県立歴博篠原家	丙
9	237	③	平面図	御家廻り図（金沢御城中絵図）	彩色	54×59	県立図書館	乙
10	新		平面図	金沢城二之丸図	彩色	72×130	県立図書館	乙
11	233		平面図	文化年中造営金沢城二之丸諸建物図	彩色	90×53	県立図書館森田文庫	乙
12・13	新	①②	平面図	金沢城二之御丸三步暮之図（2枚）	彩色	86×124	県立図書館	乙
14	236		平面図	二之丸御建物平面図	無彩	78×132	県立図書館森田文庫	乙
15	262		平面図	二の丸惣御絵図	彩色	75×143	金沢大学	乙

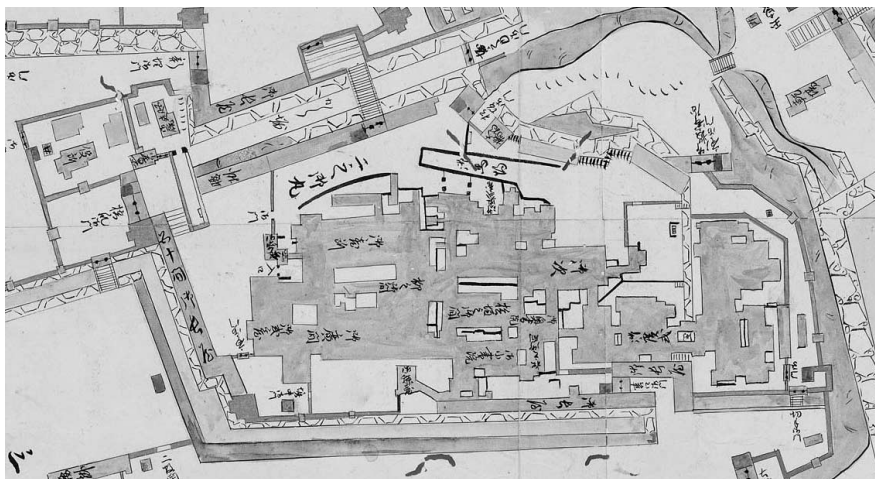
16	263	平面図	金沢城二の丸絵図	彩色	150×77	金沢大学	乙
17	新	平面図	二ノ御丸図	無彩	105×152	金沢大学	乙
18	289	平面図	金沢城二ノ丸御殿間取図	彩色	74 2×125 6	富山県立図書館	乙
19	新	平面図	二ノ丸御屋形図	無彩	272×140	土佐守家資料館	乙
20	新	平面図	二ノ丸松の間・檜垣間図	無彩	111×116	土佐守家資料館	丙
21	新	平面図	書院広間絵図	無彩	28×41	土佐守家資料館	丙
22	新	平面図	二の丸御広式書院図	無彩	28×40	土佐守家資料館	丙
23	新	平面図	大広間頂戴之絵図	無彩	28×38	土佐守家資料館	丙
24	新	平面図	奥書院絵図	無彩	28×40	土佐守家資料館	丙
25	新	平面図	御奥書院絵図	無彩	28×39	土佐守家資料館	丙
3 年寄横山家・藩士河内山家・井波大工松井家（松井建設本社）など							
1	新	平面図	未 8 月 28 日 牡丹之間儀式図	無彩	41×54	横山隆昭家文書11	丙
2	新	平面図	御判物頂戴之節御作法図	無彩	56×50	横山隆昭家文書12	丙
3		平面図	御書院座列図	無彩	105×46	横山隆昭家文書13	丙
4		平面図	被仰渡人有之時御間図	無彩	36×24	横山隆昭家文書14	丙
5	新	平面図	御組等之内被仰渡人有之候節御間配り等図	無彩	35×47	横山隆昭家文書15	丙
6	新	平面図	檜垣之間年頭御礼図 「申正月 4 日 権八様年頭の御礼被仰上候二付、御懐シ之、御前より御出シ被成候御間之図写量、本紙返上仕候」	無彩	40×31	横山隆昭家文書16	丙
7	新	平面図	天明 5 年 居間書院に於て教千代様元日御礼絵図	無彩	28 5×20	河内山勲家文書 1	丙
8	新	平面図	文化 6 年 檜垣之御間に於て人持以下御礼所絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書 2	丙
9	新	平面図	文化 7 年 松之御間二之御間に於て太梁院様御葬式并御中陰等御法事相動拝領に付披露絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書 3	丙
10	新	平面図	文化 10 年 松之御間披露絵図	無彩	28 5×20 5	河内山勲家文書 4	丙
11	新	平面図	安政 3 年 松之御間二之間に於て拝領に付披露絵図	無彩	36×24	河内山勲家文書 9	丙
12	新	平面図	正月 2 日 大広間に於て御謡初御規式絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書11	丙
13	新	平面図	正月 6 日 大広間に於て寺社方御礼所絵図	無彩	41×28 5	河内山勲家文書12	丙
14	新	平面図	小書院に於て前田土佐守隠居御礼献上物置付所絵図	無彩	28 5×20 5	河内山勲家文書19	丙
15	新	平面図	小書院に於て大森三郎兵衛御目見献上物置付所絵図	無彩	28 5×20 5	河内山勲家文書20	丙
16	新	平面図	小書院に於て御左右二行にて御印物頂戴御広蓋置付所絵図	無彩	28 5×20 5	河内山勲家文書21	丙
17	新	平面図	小書院に於て芳春院献上物置付所絵図	無彩	28 5×20 5	河内山勲家文書22	丙
18	新	平面図	小書院に於て元日御礼所絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書23	丙
19	新	平面図	小書院に於て隠居并子息御礼所絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書24	丙
20	新	平面図	小書院に於て西養寺入院之御礼所絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書25	丙
21	新	平面図	小書院人持以下大工頭御判物御印物頂戴所絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書26	丙
22	新	平面図	檜垣之御間に於て人持以下御判物御印物頂戴所絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書27	丙
23	新	平面図	大広間に於て人持頭分御礼所并平士以下御礼所絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書28	丙
24	新	平面図	小書院に於て本阿弥次郎太郎御目見献上物置付所絵図	無彩	28 5×20 4	河内山勲家文書29	丙
25	新	平面図	小書院に於て松岡齊宮太夫御目見献上物置付所絵図	無彩	28 5×20 4	河内山勲家文書30	丙
26	新	平面図	大広間に於て今津甚右衛門等献上物置付所絵図	無彩	28 5×20 4	河内山勲家文書31	丙
27	新	平面図	小書院に於て東本願寺御進物置付所絵図	無彩	28 5×20 4	河内山勲家文書32	丙
28	新	平面図	大広間に於て元日御礼所絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書33	丙
29	新	平面図	大広間に於て人持以下御印物頂戴御広蓋置付所絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書34	丙
30	新	平面図	小書院に於て若年寄竹田市三郎御判物頂戴御広蓋置付所絵図	無彩	28 5×20 5	河内山勲家文書35	丙
31	新	平面図	小書院に於て大森友次郎御目見献上物置付所絵図	無彩	28 5×20 5	河内山勲家文書36	丙
32	新	平面図	文政四年 檜垣之御間二之御間に於て拝領披露絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書37	丙
33	新	平面図	小書院に於て人持以下御大工頭御礼所絵図	無彩	40 5×28 5	河内山勲家文書38	丙
34	新	平面図	金沢城二の丸 五十間長屋平面図	無彩	111×41	松井建設本社 ⁽³⁾	乙
35	新	平面図	二の丸部屋方間取図	無彩	103×75 5	松井建設本社 ⁽⁴⁾ 朱書、6 分計	乙
36	新	平面図	二の丸檜垣之間・松之間・奥書院等平面図（付屋根ふせ図）	無彩	51×70	松井建設本社 ⁽⁵⁾ 朱書、1 間 1 寸	乙
37	新	平面図	二の丸御柱太サ指示平面図 「御柱太サ差別朱手大小之通」	無彩	55×72	松井建設本社 ⁽⁶⁾ 朱書	乙
38	新	平面図	二の丸竹の間付近平面図（付屋根ふせ図）	無彩	56×67	松井建設本社 ⁽⁷⁾ 朱書	乙
39	新	平面図	二の丸奥書院上段縁側襖絵指示図 （2 枚） （付凡例図）	無彩	24×253 (35×46)	松井建設本社 ⁽⁸⁾ 朱書	乙
40	新	平面図	二の丸御殿御居間付近の図（付水道路線）	無彩	60×56	松井建設本社 ⁽⁹⁾ 朱書	乙
41	新	立面図	裏御門 平十分一	彩色	93×80	松井建設本社 ⁽¹¹⁾	乙 2
42	新	平面図	二之御丸五正建御殿絵図	彩色	37×53	松井建設本社 ⁽¹²⁾	乙



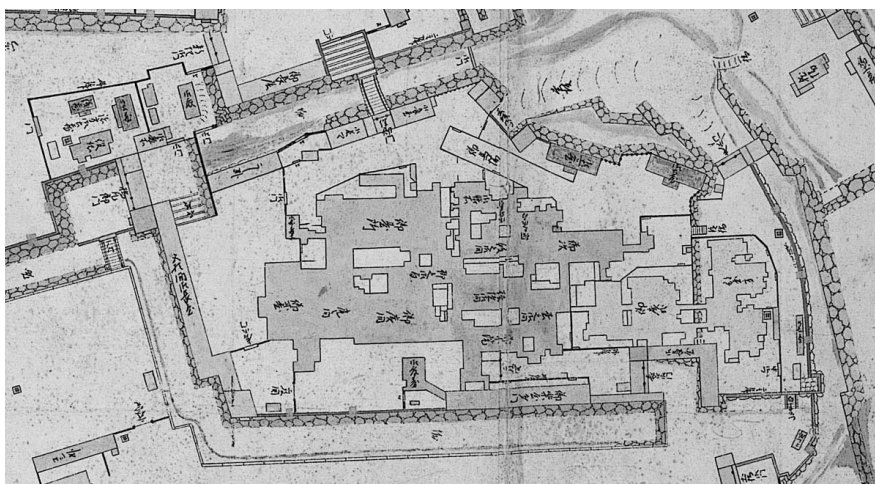
17世紀後期、元禄7年以前「金沢城二之丸座敷之図」
金沢市立玉川図書館蔵



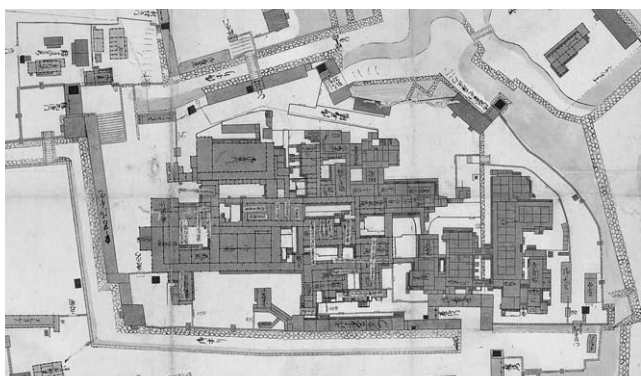
元禄10年増築直後「金沢城座敷之図二之丸」
石川県立歴史博物館蔵



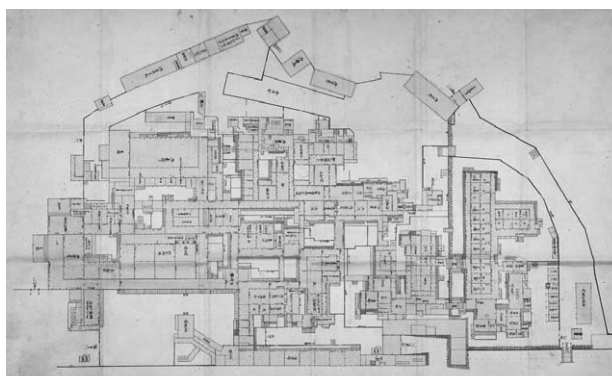
享保～延享（1716～48頃） A類「金沢城図」（部分）横山隆昭氏蔵



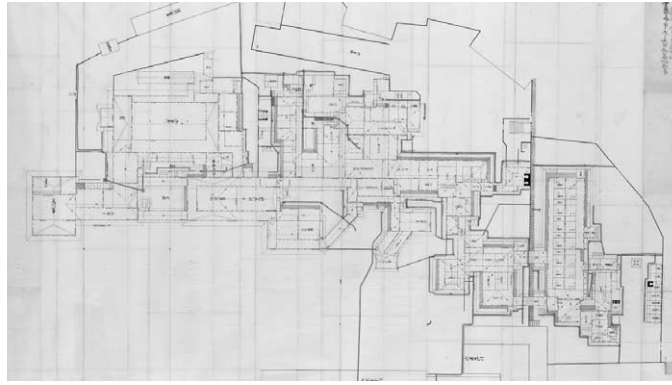
享保～延享（1716～48頃） B類「金沢御城中絵図 惣絵図」（部分）石川県立図書館蔵



宝暦元年頃以前 C類「金沢城御殿絵図」（部分）
金沢市立玉川図書館蔵

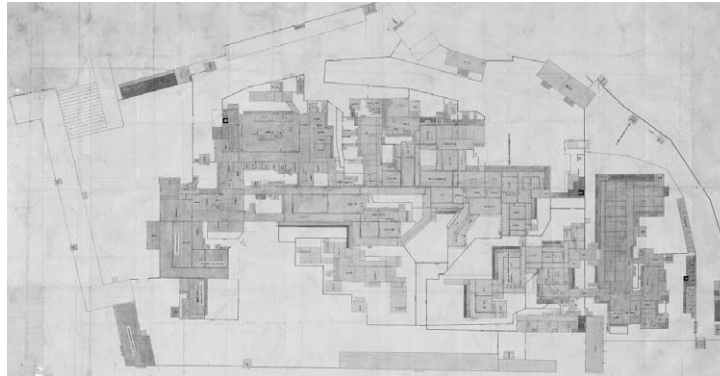


宝暦5年「金沢御城中絵図 御家廻り」（部分）
石川県立図書館蔵

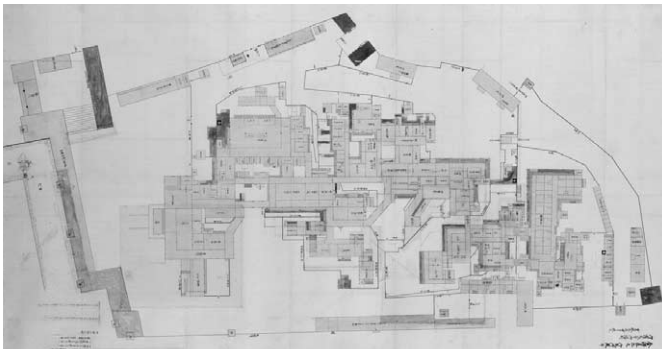


宝暦13年頃

「宝暦年中二之御丸御殿地指図」
金沢市立玉川図書館蔵

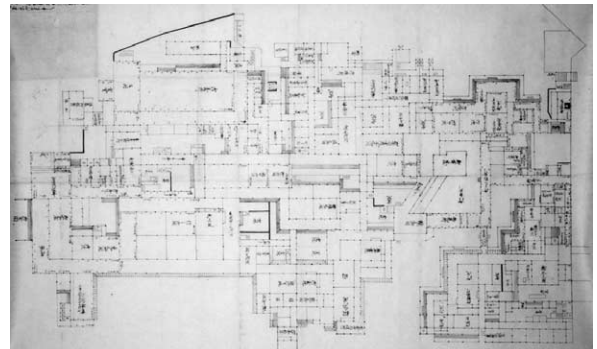


天明7年図 「文化焼失以前二の丸之図」金沢市立玉川図書館蔵



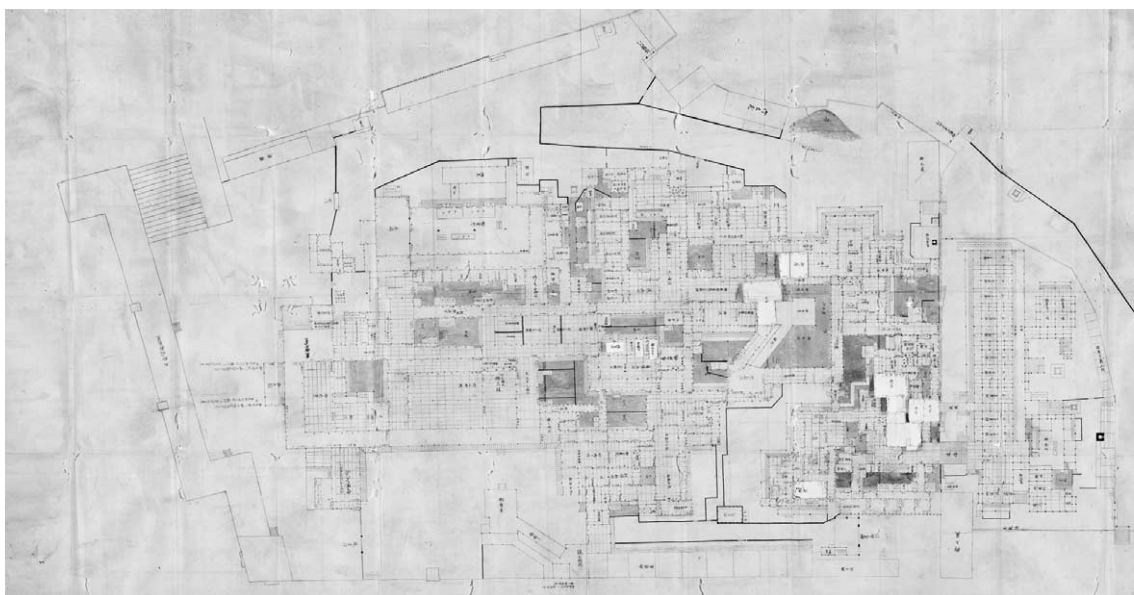
寛政3年図

「二之丸御殿御広式御絵図」
金沢市立玉川図書館蔵



文化6年4月図

「金沢城二の丸御殿図」
石川県立歴史博物館蔵



文化6年5月図

「二ノ丸御屋形図」前田土佐守家資料館蔵